結果、口止め料として與へられた、――それを彼女は、梧桐氏に打ち明けるべきであつたのを、上海を去る迄は誰れにも見せるなと云ふ汪氏の頼みでもあつたし、若し打ち明けたら取り上げられはしないかと云ふ物欲しさから、隠して居たに過ぎない。――此の言ひ譯も可なり不自然のやうだけれども、一般に日本人は同胞の肩を持つて、彼女の人氣に關はるやうな事や『ルネッサンス協會』の信用を傷つける事が内他へ傳はつては困ると云ふので、不利益な事實があつても其れを揉み消してしまつた。ところで、此れだけで見ると、新聞紙上の喧嘩では日本側が負けたのであるが、しかし支那側の報道も悉く正鵠を得て居るとは云へないのだつた。先づ何よりも眞珠を『奸譎な女優』にしたのは明らかに本人を知らない證據であつた、まだやつと十六七の少女に過ぎない事が分かつたら意外に感ずるであらう。いくら支那方に味方しても、あのいたいけな年頃の少女にそんな膽力や智慧があらうとはとても考へられない事である。次ぎには汪氏がしたたかな好色漢であることは平素から隠れもない事實だつた。さうなると、結局兩方に讎があるので、眞珠は汪氏にうまうまと口說き落され、其の賠償として汪氏は彼女に腕輪や首飾を買つてやつた、――まあそこいらが一番眞相に近いらしく、要するに馬鹿を見たのは道

具に使はれた瑤娟親子だ、と、そんな風に一時は誰れも觀察した。然るに、此の觀察がまた次ぎの事件で引つくり覆されてしまつた。――」

第二章

南の話が其處まで進んだ時に、先から何か物思ひに沈みながらぢつと耳を傾けて居た服部は、不意に言葉を狭んだ。

「君、君、ちよつと待つてくれ給へ。忘れないうちに聞いて置くが、君はその眞珠が買つて貰つたと云ふ首飾りや何かに就いて、もう少し精しいことを知らないだらうか？ どんな彫りがしてあるとかどんな模様が附いて居るとか云ふやうな事を。」

「さあ、それは分からないね、なぜ？」

「若しその話がほんたうだとすると、今でもきつと持つて居るに違ひないと思ふから、——」

「あの兒は日本へ歸つてから其れを着けたことはないだらうか知ら？」

「どうもないやうに思はれる。僕は一遍も見たことはないよ。」

「尤も日本の女は首飾りだの耳環なんてものを着けやしないけれど、女優をして居れば着ける

時がありさうなもんだね。」

「ああ、着けたいと思へばいくらでも着けられるよ。舞臺でも着けられるし、舞臺でなくてもあの兒は洋服を持つて居るんだから。」

「それぢや事に依ると、梧桐氏に取り上げられたか、でなければ着けることを禁じられて居るんだらう。何處までもそんな品物は貰はないと云ふ事にしてあるかも知れないね。」

「ああさうだらうよ。何か細工がしてあるに違ひないよ。さうでもなかつたら、その時分一緒だつた連中が今も大勢居るんだから、その噂が出なけりやならない筈だと思ふ。役者なんて者はそんな珍らしい事件があると、いくら口止めしたつてしやべらずにや居ないもんだが、さう云はれると一度誰れかに、眞珠が上海で或る支那人とどうとかしたと云ふ話をチラと聞いたことがあつたけれど、不思議にその事件は誰れもあまり問題にして居ないやうだ。」

「さうかね。あれだけの騒ぎを揉み消してしまつて内地へ知らせなかつたとすると、やはり梧桐氏の手際がうまかつたんだらうね。」

「さう云ふ事にかけると、梧桐氏よりも梧桐夫人がえらいんだよ。梧桐は正直な男だからし、

らを切ることは下手なんだが、夫人の方は大人しさうに見えてナカナカ腹が据わつて居る。何しろ生まれが生まれだから外交官の夫人にしても恥かしくないやうな素養があるし、頭が進んで居るし、此の社會であの女と太刀打ちの出來る人間は男の方にもちよつとないだらう。不斷は思ひやりのある愼しみ深い人なんだけれど、協會の爲めとか夫の爲めとか云ふ事になると、いろいろの智慧を出して、役者たちを操縱したり欺したりするのが實にうまいんだよ。だからきつと夫人が何んとかごまかしてしまつたんだね。」

「成る程、或ひはそんな事かも知れない。それに段段後になつて考へて見ると、汪氏と眞珠とが果たして關係があつたかどうかも分からなくなつて來るんだ。要するに事件の中心が何處にあるのだかサツパリ摑まへ所がなくなつてしまふんだ。」

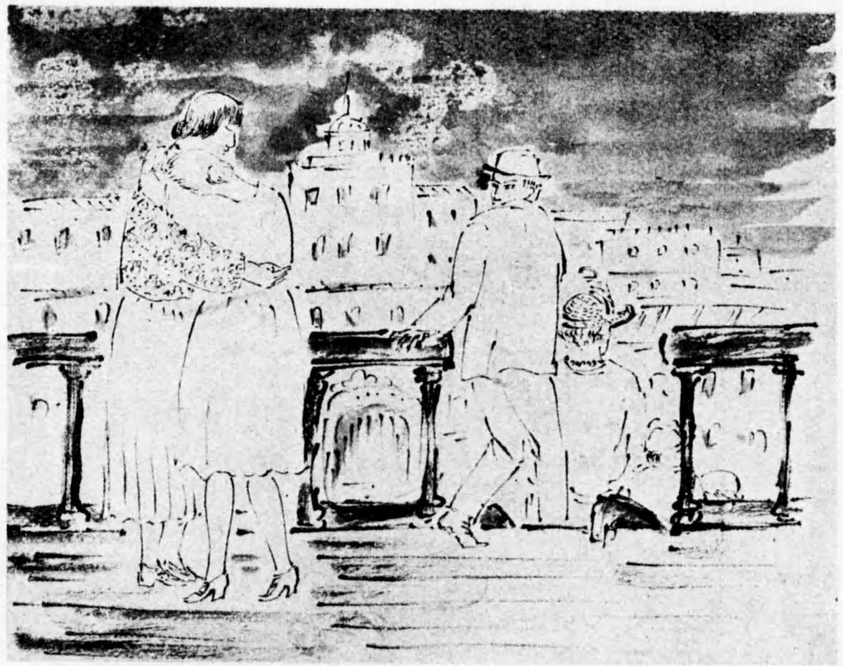
「それもやはり、わざと分からなくするやうにいろんな事を云ひふらしたんぢやないだらうか。」

「さあ、それもあるだらう、――しかし今も云ふ其の後で起こつた事件と云ふのは、決して作り事ぢやないんだ。僕は先、あの女優に二度會つたことがあると云つたね、その二度目に會つ

た時に其の事件が起こつたので、僕は多少それを知つて居るんだ。」

「ああさうだツけ、――その續きを聞かして貰ふんだツけ。――君は眞珠に二度會つたと云ふし、薫も君を二度見たと云ふんだが、やつぱり其の時に見たんだらうね。」

「ああ、さうに違ひあるまい。あの時なら舞臺で見るよりよく見えたかも知れない。――それはちやうど日本人倶樂部の歡迎會があつてから一週間ばかりも後のことで、上海に住んで居る僕の親父の知人が日本へ歸ると云ふので郵船の波止場まで見送りに行つた時なんだ。何んでも朝の八時頃だつたと覺えて居る。親父と一緒に船へ行つて知人に挨拶を濟ませてから、出帆にはまだ二三十分間があつたので、サロンで茶を飲みながらいろいろな人と話をして居た。すると、協會の一行も其の船で歸るのだと見えて、梧桐氏夫妻を始め女優らしい女がその邊にうろうろして居る。君の今の話で思ひ出したが、成る程あの總子と云ふ夫人は馴れたもので、ああ云ふ場所で人を外らさない應接のし方なんかは、藝人とは云ひながら少しも下品にはならず、しとやかで如才がなくて、さすがに旨いもんだと思つて僕は感心して聞いて居たよ。僕の親父なんかも誰れかから紹介されて、あの夫人に取つ摑まつて辭令を巧みにやられたもんだから、



――親父はあの通り子供見たいな所があるから、ひどく面喰つて居たやうだッけ。」

「さうだらうね。あの調子でやられたら君のファザアは困つたらうね。君は紹介されなかつたのかい？」

「僕は摑まると面倒だと思つたがら、其處を逃げ出してデッキの方へ行つた。さうすると其處に、何事か起こつたのか、大勢人がかたまつて居る。僕は縫かに人ごみの間から覗いて見ただけだつたが、最初は或る西洋人の女の兒と支那の婦人とが別れを惜しんで居るやうに見えた。西洋人の方も支那人の方も頻りにハンケチで眼を擦つて泣きながら立ち話をして居る。それを大勢が取り卷いて見物して居るのだつた。船の上ばかりでなく、陸にも人が集まつてみんなデッキの方を見上げて居る。ところが其の西洋人だと思つたのはよく見ると洋服を着た日本の少女で、――それが林眞珠なので、支那人の方は妓生の瑤娟なのだと云ふ。つい二三日前まで新聞であんなに騒がれたのに、その問題の二人が斯うして仲好く別れを惜しんで居るのだから實に不思議だ、實に分からないと云ふので、來合はせた新聞記者までが煙に卷かれて、みんなあつけに取られながら様子を眺めて居るのだつた。二人の話は、やはり新聞記者の一人かと思

はれる日本人が通辯して居て、その話し聲が時時僕の處へも聞こえて來たから、大凡そどんな事を云つて居るのかは推測された。『どうか此の間の誓ひを忘れないで下さい。』さう云つて瑤娟がほろほろ涙をこぼすと、眞珠の方でも同じやうな事を云つてしくしく泣いて居る。『出來るなら私も日本へ歸りたくはありません。一生あなたと離れたくはありません。私の可愛い妹よ、どうか私の事を忘れないで。』と云つて、しまひにはシッカリ抱き合つて、お互の肩の上へ顏を伏せてさめざめと泣く。そのうちに出帆の知らせの鐘が鳴り出したので、見送人はそろそろ船を下り始めたが、二人は容易に離れさうもない。で、梧桐夫人や何かが心配して、宥めたり賺したりしてやつと二人を別れさせて、瑤娟を船から下ろした。瑤娟はその時『私も一緒に日本に行くんだ。』と云つてだだを揑ねて仕方がなかつたさうだ。僕は瑤娟の跡へ附いて行つたのでよく覺えて居るが、ちやうど彼女が船を下りると、波止場の群集の間から一人の老人がよぼよぼと駈けて來て彼女につかまつた。それが此の間の苦力(クリー)の爺 —— 彼女の父親だつた。後で聞くと、父親はあまり身なりが穢いのと風采が怪しいので、上船を許されなかつたのだと云ふ。僕は其處でまた何事か起るのだらうと思つたから、暫らく波止場に立ち止まつて老人の樣子を

見て居た。と、老人は娘の肩に手をかけて伸び上りながら、船の方を向いて一生懸命に叫んで居る。果ては手を擧げたり地團太(ぢだんだ)踏んだりして身を悶える。眞珠は欄干に凭れて、悲しいやうな恐ろしいやうな何んとなく底の知れない表情で親子を視詰めて居たが、やがて船が動き出して其の表情が陸から見えなくなると、今度はハンケチを振り出した。瑤娟も同じやうにハンケチを振つた。その時老人の顏には云ひやうのない絶望の色が浮かんだ。ぱつたり地べたに倒れたかと思ふと、倒れながら水へ落ちさうな所まで這ひ出して行つて、船の影を追ひながら手を高く翳してまだ何か知ら叫びつづけて居た。ちよつと支那の俊寛を見るやうな工合だつた。いつ迄立つても老人はなかなか其處を動きさうもなかつたから、僕はいい加減にして歸つて來たけれど、それから一時間以上もさうして居たんださうだ。――事件と云ふのは此れだけなんだが、まあ君はどう思ふね？ 此の最後の出來事があつてから、前の推測はあてが外づれてしまつたんだ。瑤娟親子が道具に使はれたんだとすると、あんなに眞珠を戀ひ慕ふ筈はないからね。」

「さうして上海での評判はその後どんな風だつたらう？」

「ただ不思議だと云ふだけで誰れにも分からないのさ。それきり眞珠は日本へ歸つてしまつた

んだから、聞いて見る譯にも行かないし、みんな馬鹿にされたやうな氣持ちがしたことだらう。それから、僕はもう一つ大事な事を云ひ洩らした。老人は波止場で船の影を見送りながら叫んだ言葉は『チェンチュウ、チェンチュウ』と云ふのだけが僕に分かつたけれど、それは斯う云ふことだつたさうだ。――『眞珠(チェンチュウ)よ、眞珠(チェンチュウ)よ、お前はやはり私の伜(ゼウ)だ。お前は決して女ではない、女の風をして世を欺き、私たち親子を見拾てる氣なのだ。いくら隱しても私にはちやんと分かつて居る。お前は何んと云ふ薄情な子だらう！』――老人はそれを云ひつづけて口惜(くや)しがつて居たんださうだ。眞珠が男ぢやないかと云ふ疑ひは、もう外の者は誰れも問題にしなかつたのに、老人だけは飽く迄さう信じて居たと見えるんだね。」

「で、君はそれに就いて何か考へたことがあるだらうか。」

「別にどうと云つて、考へても見なかつたけれど、しかしあの芝居の時と云ひ、眞珠の素振りには何か知ら深い譯がありさうにも思はれる。あの兒は、今夜の樣子で見ると、あれからちやうど一年立つた譯になるんだが、もうどうしても女だと云ふ事に疑ひの餘地はない。あの老人だつて今の樣子を見たらまさか男だとは思はないだらう。だが其れにしても瑤娟の親子と眞

珠との間に、何か關係がなければならないと云ふやうな氣がする。あの兒は前に支那へ行つた事があるとか、支那で生まれたとか云ふ事實がありはしないか？ でなければ支那人の血統が交じつて居るとか？ 林眞珠と云ふ名前も、偶然の暗合と云へばそれ迄だけれども、日本人の女の名にしては妙ぢやないか。」

「いや、あれは何んでもないんだ。あの眞珠と云ふ名は、此れも暗合だと云へば云へるんだが、あの兒の肌が眞珠色をしてると云ふので、あれは梧桐氏が附けてやつた藝名なんだ。」

「成る程、あれは藝名なんだね、そりや僕もうつかりして居た。さうなつて來るとてんで、問題にならないね。」

「ほんたうの名は、たしか『林しづ』だつたと思ふ。――それに梧桐と云ふ男は弟子を取るのになかなかやかましい方で、折角世話をしても直きに止められたり謀叛されたりして困ると云ふので、女優なんかになると戸籍謄本を取らせたり證文を書かせたりするくらゐだから、あの兒の身元なぞもよく調べたに違ひないよ。何んでもあの兒の内は深川の猿江か何處かで、今では落ちぶれて居るけれど、もとは神田邊で代代藥屋をして居た東京の舊家ださうだがね。實は

僕も、眞珠の身元を知りたいと思つたことがあつて、寛治に聞いて見たらそんな話だつた。それから――ああさうだ、僕は一度あれの親父と云ふのを見たことがある。いつだつたか樂屋へ訪ねて來た時に、何んでも小間物屋の番頭見たいなをした四十五六の男だツけ。眞珠によく似て居たから、一と目で親父だと分かつたよ。まあ戸籍なんぞはごまかさうと思へばごまかせるし、梧桐の云ふ事だつてあてにはならないが、親父の居ることはたしかだし、母親もまだ達者ださうだし、何にしても江戸ッ兒の血筋を引いて居るに違ひないね。言葉も純粹の東京辯だから、――」

「だけども、あの顏つきには何處かぼうッとした。支那人と間違へられさうなところがあるだらう？」

「ああ、それはある。顏の感じから云ふと支那人臭くッて、どうも江戸ッ兒とは見えない。一つには全く大理石のやうにきめが細かで色が白いせゐかも知れない。さうしてあのぼうッとしたところがあの兒の特徴なんだ。あれが或る時には初初しい愛嬌に見えたり、或る時は妙に曖昧に見えたりして、何んだか氣の知れない子供だと云ふやうな氣を起させるんだよ。だから

ほんたうに無邪氣なのか猫を冠つて居るのか、實は僕にも分からないんだけれど、その分からないところが又僕の氣に入つて居るんだ。」

「ぢや、上海での出來事のやうな不思議なものが加はるとすると、なほ君の氣にも入る譯だね。」

「さうだ、一體あの兒にはさう云ふ不思議なところがあるんだ、——」

その時、南は服部が奇妙な眼瞬(まばた)きをするのを見た。——それは、何か斯う、遠くかすかに消えかかつた記憶を、心の底に喚び返しつつあるやうな工合であつた。が、どんよりと濁つたまま宙へ向けられて、さうして、眼瞬きを續けて居る眼つきを、若し知らない者が見たらぞッとしたかも知れない、……何かぞッとするやうな薄氣味の惡いものが其處にあるのだと云ふことを、南も感じたのである。彼れは先(さつき)から、餘程服部の好奇心を動かすべき話をしてやつた筈だのに相手が思つたほどにも驚かない樣子なので、不審を抱きつつある矢先であつた。「自分が愛して居る女の身の上に關する事だし、非常な怪しい事件なんだから、あの睡さうな顏の中にもいくらかびつくりした表情が現はれさうなものだのに、さう云へばいやに落ち着いて居る。」

——で、南は、服部が事とに依ると上海の話をちやんと知つて居て、わざと空惚けて居るのかとも想像した。けれども今日までの服部は、南に對してそんな人の惡い不正直なやり方をしたことはない。人間がガラリと變つてしまつたのなら格別だが、孰れにしてもあの林眞珠と云ふ女には深い祕密が纏はつて居てそれと上海の事件と關係があり、その關係の或る部分を服部が知つて居るとか、嗅ぎ付けて居るとかではないだらうか？ 南の推測は其處までしか行かなかつた。もともと彼れは服部の爲めに此の話を持ち出したので、自分はそれ以上頭を惱ます興味を感じなかつたのである。

「上海でさう云ふ事件があつたと云ふのは、今日始めて聞くんだけれど、……」

と、服部は續けた。

「……あの兒はまだ外にいろいろ不思議なことがあるもんだから、僕はその話を聞いてもそれ程意外だと云ふ氣はしないんだよ。そのくらゐな事があるのは當り前のやうに思はれるんだ。さうかと云つて、僕は今のところあの兒の祕密を何も知つて居る譯ぢやない、そんなに知りたいとも思はないし、いつ迄も知らずに居る方がいいやうにも考へるんだが、しかし時時、ど

うも不思議でならない氣がする。さうしてをかしいのは、僕以外で誰れもその不思議に氣が付いて居ないらしいんだ。ぢや、何處がどう云ふ風に不思議だと云はれると、僕もちよいと返答に困る。此處が不思議だと云つて指すことが出來ない。ただ腹の中で獨りで考へて居るだけなんだ。僕があの兒に惚れたのは此の不思議な氣持ちに引つ張られて行つた點が餘程あるんだよ。こんな事を打ち明けるのは君が始めてなんだが、……」

服部の薄氣味の惡い眼瞬きは、いつの間にか極まりの惡い眼瞬きに變つて居た。

「君が愛して居る女を斯う云つちゃ濟まないけれど、あの兒はどうも氣立てが素直でないやうに思はれるね。僕はたつた二度しか見ないんだが、――そりや無邪氣なところもあるし、瑤娟と抱き合つて泣いた樣子なんぞ情が深さうに見えたけれども、僕はどうも氣持ちのいい印象を受けなかつた。あの兒よりはまだあの薫と云ふ兒の方が、……」

南はさう云ひかけて急に默つた、――芝居がはねたと見えて廊下をバダバタ鳴らして來る賑やかな足音が、その時聞こえたからである。

第三章

二人の會話がちやうど途絶えた時に「やあ。」と云ふ一種豪快な音響を伴つた元氣のいい聲がして、ボトムに扮した痩せて背の高い梧桐の體軀がのつそりと這入つて來た。彼れはその獨得の掛け聲たる「やあ」を發すると同時に、輕く頭を下げると云ふよりは寧ろ反り返らせて二人の者に會釋を與へた。思はず居ずまひを直してお行儀のいい生徒のやうなお時儀をしてしまつた南は、何んだが馬鹿にされたやうで、普通の芝居ゴロツキと一緒に見られたのが不愉快であり、迷惑千萬でもあり、極まりが惡くもあつたが、服部は彼れの名譽の爲めに直ぐにも紹介の勞を取らうとせず、懷ろ手をして知らん顏をして居る。梧桐の方も其のぎろりとした一と癖ありげな大ツきな眼玉の中に、南の姿などてんで映らないらしく平然として居る。一體此の部屋にはえたいの知れない有象無象がいつも二三人ごろごろして居るのだから、見知らない男が一人ぐらゐ隅の方に轉がつて居ても別に不思議ではなかつたのであらう。それに何かに付けて英

雄の襟度を示したがる梧桐は「誰れか居るな。」と思ふと、わざと氣が附かない風を裝つて、端の者に用もない小言を云つたりえらさうな氣焔を吐いたりして見せる癖があつた。で、彼れは這入つて來るといきなり衣裳と鬘を脱ぎ捨てて、ぱつと威勢よく素ッ裸になつて、壁にかかつて居る浴衣を取つて引ッかけて、それから鏡臺の抽き出しをガチガチやらせて飾つてある支那人形を二つ三つ引ッくり覆しながら、石鹸と、手拭と、ジレットの安全剃刀とを引ッたくるやうに手早く掴んで、――總べてそれらの事を眼にも留まらない敏速さでテキパキと運びながら、一方では又服部を掴まへて、例の北國のアノ!セントを帶びた奇妙な發音で駄辯を弄した。

「おい君、一體先は何處へ行つてたんだい？」

「先ッて何時さ。」

「さつき、――さつき何處で飲んで居たんだ？　僕は金公に手紙を持たしてやつたんだ、があれを受け取らなかつたんだね。」

「受け取りやしないさ、今夜はいつもと違ふ所で飲んだんだから。」

「違ふ所で飲んでたつて？　君やあそれだからいかんよ。いつ用があつて呼びにやるかも知れないんだから、飲みに行くなら行く先をちやんと極めて置き給へ。いいか君、さうしなきや駄目だぜ。」

「ああ分かつたよ、今度からさうするよ。」

服部はそんな命令を受ける覺えはないのだけれども、梧桐の空威張りの癖が始まると、其處は馴れたもので、キョトンとした馬鹿のやうな面つきをしながら、交ぜつ返したり茶化したりするのだつた。

「此れから象潟亭へ行くやうにし給へ。彼處なら勘定は僕の方へ附けときさへすりや構はないから。――　さうでもしなけりや、いざと云ふ時に用が足りないで困つちまふぜ。君が來たらいくらでも飲ましてやつてくれろツて、帳場へ話しといてやるから。」

「そいつは有り難いな。だが象潟亭だけぢや心細いな、もう一軒ぐらゐお聲がかりの所が欲しいもんだな。」

「もう一軒？」

梧桐は茶化されて居るのに氣が付いたらしく、眼をぱちくりやらせて服部の横着さうな顏を「此奴何をぬかすか」と云ひたげに睨みつけたが、一向手應へがないので矢張り仕方なく威張り散らした。

「よし、ぢやもう一軒きめてやらう。象潟亭にチャツプリン・バアとして置かう。」

「チャツプリン・バアは御免だよ。彼處は酒がまづいんだもの。」

「ぢや、何處にするんだ。」

「さうだね、寶來軒がいいね、彼處ならまあ我慢するね。」

「寶來軒か ―― 成るほど。」

と云つたきり、梧桐はどうしたのかケロリとして、いいとも惡いとも云はずに默つてしまつた。

いつ紹介して貰へるのやら當分あてが附かなくなつた南は、此の下らない對話をぼんやりして聞いて居なければならなかつた。多分服部の事だから、「何も改まつて紹介なんかしないだつて、しやべりたけりや兩方で勝手な時分にしやべり出すだらう。」と、暢氣に考へて居るのかも知れない。それに今も云ふ通り梧桐はそんな風にべらべら云ひながら、始終せはしく立つたり坐つたりして居るので、ちよつと紹介する隙がない事も事實だつた。南は先ッぱ せせッこましい此の部屋の空氣をひどく落ち着かないもののやうに感じたが、成る程梧桐の如く性急に動いて居れば、此れで差支へない譯である。南がこんな所に住んで居たら、一ン日暇があつても一ページも本を讀むことが出來ないと同じく、梧桐は此處に住んで居なかつたら、とても活潑な仕事なんか出來ないのであらう。實際此の部屋が落き着かない以上に此處の主人公は落ち着かない人間であつて、彼れが這入つて來るや否や、狹苦しい室內にある總べての物、―― 低い天井や、蒸し蒸しする人いきれや、南無妙法蓮華經の掛け軸や、細細した支那人形や、ケバケバしいメリンス友禪の坐布團や、總べてそれらの甚だ落き着かない感じを與へたところの物が、俄に主人公のガラガラした音聲や、目まぐるしい擧動や、掏摸の親分じみたキョロキョロした眼つきと極はめて適當な調和を保つて「此の部屋にして此の男あり」とでも云ひたいくらゐ不思議にシツクリとあて箝まつて居る。おまけに彼れは非常な汗搔きと見えて、お白粉を塗つた顏の地肌から玉のやうに滲み出る汗を、ぽたぽた額から鼻の頭から脣の周りまでも滴らしながら、

時時うるささうに掌で拭き取つては序に長い髪の毛を逆にばらばらと撫で上げる、その爲種が一層彼れを性急に見せて居ることは云ふ迄もない。何しろ彼れ一人が居る爲めに、此の小さな部屋が今や剛軍の巷の如き活況を呈しつつあるのである。

以上で大凡そ、讀者は此の劇壇の怪物たる梧桐寛治の風采を想像されたことであらうが、しかし出來るだけ其の人相や骨格の工合を明瞭に記載して置く必要があるし、ちやうど幸ひにも手持ち無沙汰で控へて居る南が、それとなく彼れの容貌に觀察を注ぎつつある折柄であるから、暫らく南と共に研究を進めて見よう。――研究と云ふと大袈裟のやうだけれども、梧桐の顏は單に顏だけとしても研究に値するほど爾く珍なものであるのである。で、それを說明する爲めには先づ彼れの體を一箇の建築物と見做して、全體の構造から說いてかからなければならない。前にも述べたやうに、彼れの體軀は痩せた背の高いものであつて、ぬッと衝ッ立つた所を見ると、巍然たる建物ではなかつたが、極めて峻峭な突兀とした火の見櫓の如き感じを與へた。既に火の見櫓であるから、その建物の最も重要な部分は頂邊の櫓にあるので、その他の部分は櫓を支へて居る足場に過ぎない。つまり、梧桐の首から下は、彼れの偉大なる容貌を普通の人

間の肩よりは一尺も高く持ち上げて居る足場なので、而もその骨組みは餘りに嚴乘に出來て居なかつた。火の見櫓でも少し氣の利いた奴なら鐵筋で組み上げられて居る筈だのに、梧桐のは細い木か竹で出來て居るぐらぐらした安普請で、それが恐ろしく高いのだから、風が吹くと中途から眞ッ二つに折ッぺしよれてしまひさうだつた。痩せた人間にもいろいろ型があるもので、たとへば此處に居る南なども、「鐵の如く痩せてコチコチした」胸郭を持つた、同じやうに背の高い男であることを讀者は記憶せられるであらう、だが二人の痩せ方は恰も彼れ等の性質が違ふやうに違つて居るのである。南の場合には其の特徵が彼れの人柄を上品に見せ寂しく見せて居るのだけれども、梧桐の場合には其れが全然反對の效果を擧げて居る。即ち後者は痩せて居る爲めに精悍で、豪宕で、粗野で、磊落で、いくらか狡猾なやうにも見える。此の相違の生ずる所以は、兩者の體つきを詳細に比べて見ると頷かれるのであつて、前時は色が黑く肉が引き締まつて、古武士のやうにガツシリした太い骨組みを持つて居る割りに、なだらかな肩の線が何んとなく女性的な印象を與へるのみでなく、顏立ちがいかにもきやしやで溫和さうであり、殊に冴えた小さな瞳と、五分刈りにしたサツパリした頭の鉢とが、その體格を實質よりは消極

的に見せて居るのだが、後者はあらゆる點でそれと裏表になつて居る。第一に梧桐の骨格は今も云ふ通りの安普請で、氣の毒なほど肉づきが貧弱であつた。「巳は此れでも學生時代にテニスとボートのチャムピオンだつたんだぞ。」さう云つて彼れが屢次自慢するところの體つきは、決して健康なものでなかつた。若し彼れと南とを裸にして體格檢査を行ふとしたら、南の方が數等勝れて居たことであらう。それは一つには彼れ等の境遇にも由るのだと云へる。なぜなら、南のやうに良心に疚ましい所のない、物靜かな、規則正しい日を送つて居る者にこそ人間の眞の健康は得られるので、不摂生な生活に陷りがちの俳優の體に、丈夫な肺臓と強い心臓とを求めることは無理かも知れない。彼れ等の多くは、若い時代に幾ら健康さうに見えても、知らず識らずの間に、精神と肉體との何處かに長生きの出來ない暗い傷ましい手瑕を負ひ易いものである。梧桐も若い頃には可なり達者だつたし、今でも彼れを取り卷いて居る淺草の俳優たちは大概二十前後の血氣盛んな者ばかりであるから、自分も負けない氣でガムシャラを通しては居るものの、あと二三年で四十になる彼れの體は、彼れ自身が知らないうちに餘程の打擊を受けて來て居るのだつた。彼れはよく素ッ裸になつて胸を叩きながら威張つたものだが、實はそんなに

威張れた譯ではないのである。背中を見れば肩胛骨が二枚の板のやうに飛び出して居るし、肩の所では鎖骨の隙間が茶飲み茶碗ほどに深く凹んで居るし、その他一枚一枚透いて見える肋骨、左右の拇指と中指とで輪を作れば其の中に這入つてしまひさうな胴周り、僅かな筋でやつと繋ぎ合はされて居る上膊骨と下膊骨、片手でも抱へられさうな細い腰、もう少しで外づれさうなグリグリと動く膝の關節、棒杭のやうな脛、骨ばかりの指、さうしてそれらを蔽うて居る皮膚の色は寧ろ白い方だつたので、南の體格を鐵とすれば彼れのは弱弱しい竹細工であつた。ただその竹細工の結び目と結び目との距離が非常に長いと云ふこと、つまり身の長けが高いと云ふこと、それだけが取り柄であつて、若しもう二三寸も背が低かつたら、彼れの俳優としての値打ちの半分は減殺されたであらう。

ところで、そんな脆さうな體質の彼れが、なぜ皆からそれほど恐がられて居たのであるか？何故に彼れは「雷寛治」であつたか？ ―― 此の疑問に答へるものは即ち研究に値するところの ―― 梧桐自身が常に「容貌魁偉」と己惚れつつあるところの ―― 頸から上の部分なのである。成る程それはよく云へば容貌魁偉には違ひないのだが、しかしそれだけではとても形容

し切れないさまざまな怪異が其處にあつた。なぜなら其の顏は正直、奸惡、寬大、殘忍、朴訥、僞善、豪膽、臆病、卑屈、神性、獸性、愚鈍、神經質等、凡そ此れ等の矛盾する性情の特徵を、そのトゲトゲしく背張つた馬面のうちに悉く具備して居たのであるから！ 勿論人は多少矛盾した要素を其の表情に持つて居るのが普通ではあるが、梧桐の如く甚だしいものはめつたに例がないのである。或る皮肉屋は彼れの容貌を評して「剝製の大蝙蝠」と云つた。また口の惡い女優は彼れを罵つて「河馬」と云つた。これらの警句は幾分か實物を髣髴せしめるには足りるけれども、要するに一面の觀察たるに過ぎない。で、讀者が若し此の不思議な面魂に就いてもつと精しく知りたいと思ふならば、所謂火の見櫓の頂邊にあるひよろ長い形をした物、——二等邊三角形の頂點を下にした輪郭を持ち、眼窩や、蟀谷や、頰骨の下や、顎骨の左右やに數箇所の陷落を有し、それの中にそれ自身の複雜な影を作つて居るところの、一箇の人間の顏を先づ想像して見るがいい。さうして其の顏の上に、石川五右衞門のそれに似た、漆の如き眞黑な分厚な頭髮の層があり、且つその層に屬する髮の毛ははりねずみの毛の如く强いもので、ミツシリと一面に密生しながら一本一本眞ツ直ぐに逆立つて居ることを考へて貰ひたい。

此の頭髮は彼れの肉體が持つて居る唯一の美であつて、公園の藝者や銘酒屋の女どもが梧桐にお世辭を使ふ時には、いつもそれを褒めたものだつた。——「ねえ先生、あたし先生の持つてらつしやるものでほんたうに羨ましいものがあるわ、少し分けて頂きたいわね。」と、口のうまい女はさも感に堪へないやうに云ふ。「ははあ、何かね、何が欲しいね。」さう梧桐が悠然と脂下る。「あたし先生のおぐしが欲しいのよ！ そんなに澤山あるのだからちつと分けて頂きたいわ。癖がなくつて、眞ツ黑で、つやつやして居て、まあどうでせう！ 男には勿體ないわ。」などと、云つたやうな工合である。——勿論此の讃嘆の言葉には掛け値があり、その頭髮は立派であればあるだけ却つて物凄い感じがした、しかしそれの濃い黑さの爲めに顏の肌は實際よりも白く見え、且つ上せ性らしく紅潮を呈して居て、櫻色に燃え上つて居た。で、肉づきの貧弱な彼れが活氣縱橫に見えたのは、長い軀幹の外に此の頭髮と櫻色の皮膚と、グロテスクな太い眉毛とキヨロキヨロした眼玉とが重な原因であつた。若し人が梧桐の顏を見たあとで文樂座の人形芝居を見たとしたら、彼れはあの人形の持つて居る不氣味な眉毛と眼玉とを甚だ自然に感ずるであらう。さやうに梧桐の顏にあるそれらは極めて非凡だつたのである。幸ひにして彼れ

の額は可なり廣かつたからいいけれども、それがもう少し狹かつたら、どうかすると眉毛が有り餘る髪の毛の支脈のやうに見え、頭の領域が岬の如く其處へはみ出して來たものと見えたかも知れない。（讀者はここで、彼れが青森縣の生まれであることを思ひ出して欲しい。つまり彼れの斯くの如き毛深さはアイヌの血が交じつて居ることを推量させるに十分であつた。）さてそのいやが上にも吊るし上つた、ブラシのやうにこんもりとした八の字の茂みの下にある二個の眼玉、――「剝製の大蝙蝠」の眼玉であり、「河馬」の眼玉であり、「掏摸の親分のやうな」眼玉である偉大なその二つの光りに就いては、既に度び度び引き合ひに出したことであるからくだくだしい叙述は省くとして、ただそれらが刻刻に推移する彼れの氣分につれて變幻極まりない表情を浮べること、彼れをして新劇團の團十郎たらしめて居るものは實にそれらであることを擧げて置かう。次ぎに、眼の下には馬面に相應して長いところの鼻があるのだが、見逃してならぬことは其の鼻筋がだんだん下へ來るに從つて、微かに右の方に拗れて居たのである。此の爲めに彼れの顏は、右の半分と左の半分とが多少面積や形狀を異にして居る譯であつた。ただ聊か慰むに足りるのは、此の缺點が面と向かつただけでは容易に人の注意を惹かなかつた。全くほ

んの些細な不均齊、極く僅かな、物差しで測れば恐らく一分の何分の幾つかに過ぎなかつたであらうほどの狂ひであつた。けれども人間の顏にある斯う云ふちよつとした歪みは、鏡へ映して見ると非常に顯著に分かるもので、梧桐の場合にもさうだつたのである。それ故彼れは自分で鏡を見ることは好きだつたが、人に覗き込まれると、――殊に、あまりつくづくと視詰められたりすると、時時イヤな顏をした。――「あらをかしい！　先生の顏は鏡で見ると鼻がこんなに曲がつてるわ。」或る時眞珠がそんなことを云つた。すると梧桐は相手が彼女では怒る譯に行かず、あくびを嚙み殺すやうな工合にムーツと鼻の孔をひろげて、脣を蹈ん張つて、「ナニ曲がつてやしないんだよ。鏡と云ふものは右と左があべこべに映るもんだから、曲がつてないでも曲がつてるやうに見えるのさ。かう云ふのを心理學で錯覺と云ふんだ。いいかね、よく覺えて置き給へ。」さう云つて眞面目臭つて居た。（實際彼れ自身が錯覺と思つて居たのかどうか、殘念ながら其の點は明瞭でない。）しかし錯覺でない證據は、彼れの二つの鼻の孔を比べて見ると誰れにでも直きに分かつたであらう。と云ふのは、左の孔の方が大きく開いて居るのに反して、右の方のは妙に平ベッたく壓し潰されて居た、それはつまり、彼れの鼻梁が倒れかかつた家の屋根

のやうに、それだけ右の方へ傾いて居たと云ふことになる。さうして其の鼻筋の線を延長すると、普通の人なら垂直に臍へ屆く筈であるのに、彼れのは右の脇腹へ屆いた。故に此の斜ツかけの柱の兩側に造作が附いて居るところの彼れの顏全體は、屋臺骨の曲がつた建築のやうなものであつた。若し人が彼れの髮の毛や眼玉にばかり氣を取られずに、少し注意して右半面と左半面とを觀察したら、敢へて鏡に訴へる迄もなく其の不揃ひを指摘し得たに違ひない。たとへば小鼻の左右にある皺にしても、左の方は淺く長い代りに右の方のは深く短いことを見出すであらうし、從つて其の二つの皺の先きにある脣に於いても、左端は右端より下つて居ることを知るであらう。此の皺と脣との關係は遂に何處までも餘波を及ぼして居る譯で、脣が水平でない結果、顏が不整形であり、顏が不整形であるからして、左の頰は廣く餘裕があり右の頰はやや窮屈にちぢこまつて居る。要するに均齊を保つて居る部分は眼から上だけに過ぎなかつた。斯くの如きびつこの目鼻立ちを持つた彼れは、ここで繰り返して云ふが實に幸ひにして馬面だつたのである。なぜなら其の顏の寸が今少し詰まつて居たら、歪んだ形がどれほど目立つかも知れないのであるから。その點で彼れを造つてくれた神樣は慈悲深かつたとも云へようし、或ひは

反對に意地の惡い神樣で、あまり顏が長過ぎるがら、ちよいといたづらに鼻の先きを曲げて見たのだとも云へるであらう。

かう云ふ風に書き立てると、一人の人間の容貌を說くのも一國の地勢を述べるのと同じ勞力が入るものであつて、現に此れほど紙數を費やしても梧桐の顏に就いてはまだ云ひ足りないところが多いやうに思はれる。が、餘り煩瑣に亙らないことにして、最後に彼れの多趣多樣なる表情のことを書いて置かう。彼れが或る時は善人に見え、或る時は惡人に見え、或ひは癡鈍に見え、或ひは狡猾に見えたりするのはなぜであるか？ そのさまざまな矛盾した表情は何處から生ずるのであるか？ と云へば、それは顏の造作の不揃ひから起こるのである。即ち複雜に喰ひ違つた目鼻立ちから生ずるのである。彼れの左の頰ツぺたが靈だとすれば右の頰ツぺたは夜であり、脣の左端が笑ひながら右端が詛ひ、左の鼻の孔が怒つて居る時に右の鼻の孔は泣いて居る。斯くの如き容貌が、或る入り組んだごたごたした感じを與へるのは當然ではないか、どんな場合にも一と癖ありげに見えるのは尤もではないか。彼れが一箇の怪物たる所以、——世間から誤解されたり、買ひ被られたり、蜂毛をふるはれたり、信賴されたり、敵視された

り、可愛がられたりする所以は、皆そこにあつた。さうして結局、彼れは其の歪んだ顔の爲めに損よりも得をして居た。「梧桐は天才だ、彼奴には一種の閃きがある、今にきつと何かやり出す。」―― 彼れ自身がさう信じて居るのは云ふまでもないが、彼れを知つて居る俳優や文士仲間にもそんな噂をする者が少なくなかつた。一體歪んだ顔と云ふものは、不具者か精神病者か、でなければ天才を連想させるものであるから。

さて、其の晩圖らずも其の樂屋へ落ち合つた南と梧桐とは、單純と複雜、透明と混濁との美事な對照を成した二人であつた。前者は後者から閑却されつつある間に、どれほど彼れを觀察し得たかは分からないけれども、しかし人は多くの場合、全く自分の對蹠地にある性格に接すると、反感を抱くよりは快感を覺えるものである。殊に此の二人のやうに、彼等の間に共通な利害關係がない時は尙ほさうである。そんな譯で、南が梧桐から受けたところの第一印象は大體に於いて惡くなかつたと云へよう。最初に其の姿がぬッと現はれて、調子外づれて度强い聲が耳元でガンガン鳴り亙つた時には、多少の壓迫は感じたものの、やがて駄辯を弄し始めて服部に茶化されて居るのを眺めつつある間に、梧桐と云ふ人間の中にある滑稽な愛すべき方面が、たんだ

んと南に分かつて來るやうな工合だつた。手持ち無沙汰で困つて居た彼れは、此の奇怪な男の顏面の運動を見て居るうちに次第に安心をなし、退屈でなくなり、しまひには面白くもなつて來た。

「馬鹿なのか偉いのかハッキリしないが何しろ變つた人物だ。こんな人は會つて話をするよりも見て居る方がいいのかも知れない。」

南はちよつとそんな風に思つた。と、今しがた平然として相手を煙に卷いて居た服部は、何んと思つたか其の時急に改まつた口調で、

「梧桐君、君に此の人を紹介しよう、――」

さう云つて開き直つた。

「ははあ。」

と云つて、鼻を仰向けて「あー」の臀の方を引つ張りながら、梧桐は安全剃刀と手拭ひをぶら下げて風呂へ行かうとしたところを出口で立ち止つたまま、眼下に見下すやうな顏つきをした。

「これは僕の友達で南と云ふんだよ。――」

「はあさうかね。」

「―― 君は南博士を知つてるだらう？ 上海で君の芝居を見たことのある、―― あの人の息子なんだよ。」

「南章一さんの？ はあ成る程、ああさうでしたか、僕が梧桐寛治です。」

さう云つて居るうちに其の様子は驚くほど早く變つて、口元には薄氣味の悪いへらへら笑ひが浮かび、眼玉は輝やかしく晴れやかになり、聲は猫撫で聲になり、總べての動作が頗る御機嫌のよいオツチョコチョイになつた。

「ぢや、あなたも上海に入らつしやつたんですか？ お父さんと御一緒に？ や、それはどうも、――」

そこで二三度追從的にピョコピョコ頭を下げて、ドギマギしながら額からぽたぽた汗を滴らした。

「すると歡迎會にも御出席なつたんですね。いやあの時はどうも、甚だどうも詰まらんものを御覽に入れまして、ハナハダ恐縮。……さうですか、服部君とは以前から友達なんですか、

なあんだそんな譯なんですか、しかしようこそお出でで、どうか御ゆつくりなすつて下さい、僕はちよつと風呂へ這入つて來ますから。…… ねえ服部君、今夜は一つ三人で一杯飲まうぢやないか。久し振りで支那の話でもしようぢやありませんか。まあいいですいいです。直ぐに來ますからどうか御ゆ つくり。」

南はろくに口も利けないで茫然とした。

第四章

われらはフェアリー、
三體具足のヒカトの神の
戰車と一緒に日が出りや逃げ出し
夢と同じく暗くなりや飛び出す。……

手拭をぶら下げて樂屋を出た梧桐は、此の歌の聲が聞えると何かしら思ひ付いた事があるらしく、キョロキョロと邊を見廻しながら廊下の曲り角でピタリと立ち止まつた。

「おい金公、ちよつと、――」

「は？」

と云つて、出合ひ頭に呼び留められたのは、其の幕切れのパックの歌を唄つて居た「金公」だつ

た。

讀者は既に此の剽輕な男を服部の留守宅に於いて見た筈であるが、一體何處の劇團にも此の金公のやうな剽輕者が一人や二人は居るものであつて、彼等は舞臺でも樂屋でも常に自ら三枚目を以て任じ、其の獨得の粗忽と滑稽とを賣り物にして一座の者へ愛嬌を振り撒き、座長や羽振りのいい女優たちに小うるさく附き纏つては、彼等に頤の先きでこき使はれるのを無上の光榮として喜び、下らない事におべつかを云つたり賴まれもしないのに用を足してやつたりする。斯う云ふ徒輩は、つまり一種の變態性慾から俳優生活に這入つたので、舞臺では觀客に對して幇間となり、樂屋では其仲間に對して――殊に女優に對して――幇間となることを唯一の悅樂としつつ生きて居るのである。しかし彼等が其目的通り衆人からちやほやされ重寶がられる爲めには、容貌なり態度なりの何處かしらに多少低能じみた所がある事と、毒にも藥にもならない好人物である事とが必要條件になつて居るので、中には滿更の低能兒や好人物でもない癖に、わざとさう見せかけてゐる徒輩も少くはないのである。が、それ程までにして人から輕蔑されようとする哀れな心根を考へて見る時に、實際さうである事とさう見せかける事と

の間にどれほどの相違があり得ようか。要するに彼等は端から見れば醜い人間の屑であつて、而も彼等自身は此の上もない幸福を感謝して居る。人は彼等を「馬鹿だ馬鹿だ」と思ひながら、つい其の愛嬌に釣り込まれてからかつたり玩具にして見たり、道具に使つて見たりする。さうして知らず識らずの間に、彼れ等に其の望み通りの「輕蔑」の惠みを垂れてやり、彼等の爲めに却つて悦楽の道具にされる。此の幇間的俳優の極めて代表的な一人、――それが即ち「金公」であつた。歳は二十三であるがやつと洟つたらしの時期を過ぎたばかりのやうな、子供子供した締まりのない圓顔、その顔にも拘らずてかてかと油を塗つて眞ん中から、綺麗に分けた眞黒な髪の毛、色白でふつくりした柔かさうな女性的な肉附き、甘つ垂れた口のききやう、下つた眼尻、十六七の踊り兒よりも低いくらゐな小柄な體格、不恰好に短かい手足、――誰れしも其れを見ればちよつとは可愛くなる奴で、えらがり屋の男たちやいたづら好きの女どもが此の金公を面白がるのは無理がなかつた。彼れは喜劇の舞臺へ出ては女優たちに頭を擲られ、樂屋へ歸つては梧桐の雷に時時ボカボカと見舞はれながら、その癖いつも彼れ等の心に取り入つて居て、忠實な小使ともなり好い暇潰しの相手ともなり、何かにつけて目を懸けて貰つては

愉快に暢氣に暮らして居る男だつた。本名は水木金之助、――だが仲間うちでは「金公」若しくは「金ちやん」で通り、お客からは「チヤプリン」と云ふ諢名を貰つて居た。それにチヤプリンの眞似がうまいからであるが、今度の芝居でパックの役が大中りを取つてから、女優たちは彼れを「パックさん、パックさん」と呼んだりした。

「何んてたつて已より外にパック役者は居ねえんだからな。」

醉ッ拂ふと彼もさう云つて自慢をした。しかし此のパック役者にもたまには艶福があると見えて、仲店の裏通りにあつたもとの萬里軒の上さんで四十幾つになる女が、先の亭主を追ッ拂つて彼れを二階へ引き擦り込んだのはつい近頃のことであつた。それ以來萬里軒は「チヤプリン・バア」と改名して、金公は其處の主人とも附かず居候とも附かず上さんの厄介になつて居るのである。で、そんな關係から樂屋の連中が始終此のバアに行くので、梧桐は金公を一種の間諜として役者たちの謀叛や不平を搜り出す方便に使つて居た。實際、臆病でお人好しでたわいのない輕口を云ふより外には働きがないやうに思はれ、誰にでも氣を許されて居た金公は、仲間うちの祕密を嗅ぎつける機會が多かつたし、梧桐に威嚇されると直ぐ忠義顔をしてべらべら

しやべつてしまふのだつた。——

「おい金公、ちよつとお前に聞きたい事があるんだがな。」

梧桐はさう云つて、半ばは脅やかすやうな、半ばは手なづけるやうな調子で、何か重大な事件がありさうに聲をひそめながら、その肩ぐらゐ迄しかない金公の耳の所へ大きな顔を持つて行つた。

「實は垂水の事なんだがね、垂水の奴あ此の頃毎晩どつかへ引け込むッて話だが、相手は誰だか知らんかね？」

「へえ、垂水君が？」

金公は眼を圓くしたが、梧桐に一と睨みされると急にをかしい程眞面目臭くなつて、子細らしく小首を捻つて見せた。

「ですが先生、そりや私あ初耳ですな、そんなこたあ——どうも——何だか變ですな現にいつだつて私ん所へ來ちや夜おそくまで飲んでますぜ。」

「何時頃まで？」

「へえ、さうです、一時か二時頃まではたしかです。」

「垂水がかい？」

「へえ」

梧桐は妙に陰欝な眼つきをして、ケロリとした相手の横顔を悲しさうに眺めた。

「ふん、さうか、垂水はいつもお前ん所へ行つて居るのか、——ぢや、波川はどうだね？」

「波川君だつて日に一遍は來ないこたありませんや。何です先生、一體何かあつたんですか。」

「うん、……まあそんなこたあどうでもいいんだ。」

「へえ。」

と云つて、金公はチラリと梧桐の様子を看て取つて、その持ち前の可愛らしくそそッかしいお時儀をピョコピョコと續けながら、

「でも何かあつたんなら、どうか私に仰つしやつて下さい。ねえ先生私あきつと探つて來ますぜ。誰か此處の女優のうちにそんなのがあるんですか。」

梧桐の眼つきはいよいよ悲しさうな曇りを帶びて、自らの愚を憐れむやうな狼狽の色さへ示しながら、暫くモジモジと考へて居たが、やがて又金公を動物電氣にでもかけるやうにギロリと物凄く一と睨みして、一段と聲を落した。

「おい、此の話は誰にも云ふなよ、――實は近頃眞珠の素振りに變な所があるんだが、相手は內の樂屋の者に違ひないんだ。」

「そりや驚きましたな。へえ、そんな事がありますかな。だつて眞珠さんはまだからツきし子供ですぜ。」

「誰か彼の兒に惡い智慧を附ける奴があるんだ。どうも已の考へぢや垂水か波川らしいんだが、お前何か聞き込んだ事がありやしないか。」

「へえ、ございません、――ございませんが、そんな事があつたら第一私が承知しねえや、よどさんす先生、どうか私に任せて下さい。大概な事あ私が調べりや直ぐ分りますよ。」

其の時大部屋に話し込んで居た女優連が、騷騷しい足音を立ててきやツきやツとふざけながら此方へやつて來る樣子だつた。

欠

「それぢや垂水と波川に氣をつけろよ、いいか、頼んだぜ。」

梧桐は口早にさう云つてから、何喰はぬ顏でスタスタ廊下を歩き出した、――ヒボリタの總子夫人を先に立てて、ヘレナの芳子や、ハアミヤの薫や、ティテーニアの眞珠などが、ぞろぞろ繋がつて來る花束のやうな一團と擦れ違ひながら、――

「パックさん、パックさん、そこで何してたの？」

ぼんやり突つ立つて居た金公は、其の花束に包圍された。

「また先生におべつかを使つてたのね？」

さう云つて眞珠がからからと笑つた。

「おべつかなんぞ使ふもんかい、何云つてるんだい。」

「あら、醉つてるのよ此の人は！」

眞珠の後から首を出して薫が云つた。

「醉つてるのが悪いかい、何云つてるんだい、實は己に名案が浮かんだんで、此の次ぎの出し物の事を先生に相談してた所なんだ。相談したら其れがいいッてんでもうちやんと極まつち

欠

やつたんだ。へん！どんなもんだい、斯う見えたつて憚かンながら馬鹿ぢやあるめえ。」

「あら、ほんたう？」

「ほんとにもう極まつちやつたの。」

「極まつたんなら話して頂戴な。」

「誰もバツクさんの事を馬鹿だなんて云やあしないわ。」

「云はなくツたつて馬鹿だつて事あ自分でもちやんと知つてるんだ、……」

フェアリーの女王や希臘の女たちのしなしなした裸體の肩の輪の中に入りながら、金公はひどく雄辯になつた。

「……だが馬鹿だつて好い智慧が出ないたあ限らねえんだ。何しろ今度の出し物と來た日にや、帝劇へ梅蘭芳が來るツてんで、此方でも押ッ被せて同じ物を出さうツてんだから素敵なもんだ。な、分つただらう、――「基督一代記」がいいッたつて「眞夏の夜の夢」がいいッたつて此れで入りがなけりやあ見物の方が間違つてるんだ。一體己たちは何の爲めに支那へ行つたと思ふんだい？憚りながら日本で支那芝居がやれるなあ此の劇團ばかりなんだ。――何でえ。梅

蘭芳がどうしたと云ふんでえ、己たちあ彼んなものあ疾ッくの昔見て來たんだ、あんな眞似は譯はねえんだ。……」

金公は鼻の先をツンと天井へ向けて、だだッ兒が威張るやうに體を搖すつた。

「おや、入らつしやいまし――」

その一團がどやどやと樂屋へなだれ込んだ時、さう云つて其處に居る二人の者へ慇懃な挨拶をしたのは總子夫人だつた。彼女は服部の外にもう一人の見知らない男が、――恐らく普通の樂屋ごろつきではなささうな品の好い青年が、其處に固くなつて控へて居るのに氣が付いたのである。

此の有名な劇界の賢夫人、――服部の言葉を借りて云へば「――生れが生れだけに外交官の夫人にしても恥かしくない」ところの、田舍者丸出しの粗野な夫とは打つて變つた落ち着きのある總子の姿は、南に取つて今夜が始めてではないのだけれども、しかし上海で見た時よりは

やや更けて居て、才氣煥發の趣が失せた代りにはいかさま「賢夫人」らしい品位を増して居るやうに見えた。此ればかりは夫と同じなゆらりとした長い體軀、何處となくゆとりのある迫らない態度、青白い、蠟のやうに冴えた、寧ろ不健康を想はせる滑かに透き徹つた顏の色つや、さうして最後に、悧巧さうな廣い額と考へ深さうな瞳とを持つた、能の面の如く端正な面長の輪郭、―― そのしつとりした無表情とも云へるくらゐに靜かな容貌は、明かに此の人が俳優となるべき素性の者でない事を、「大女」と云ふ資格を除けば俳優として不適當でさへある事を物語つて居るやうで、「あの女を見ると色氣は起らないが自然と頭が下る」と云ふ役者どもの批評は事實だつた。

「あたくしどうも何處かでお見かけ申したやうだと存じましたが、それぢや南博士のお坊つちやんで居らつしやいましたの。まあお懐しうございますこと。」

などと云つた調子で、夫人はやがて其の頃の旅の思ひ出でを語り出した。上海の事、南京の事、蘇州の事、天津の事、それから北京の事、…… 萬壽山の離宮をどうお感じになりましたとか、天壇の建築はどうでしたとか、宿屋は何處へお泊りになりましたとか、……

南は此の傳で親父も惱まされたんだなと思ひながら、面白くもない伯母さんの話を聞かされてゐるやうな心持ちで上の空の返辭をしてゐた。有體に云ふと、彼れは山の手趣味の青年であるから此の山の手式の夫人が氣に入りさうなものだに、何となく子供扱ひにされつつあるやうで、梧桐に會つた時の半分も好い印象を受ける譯には行かなかつた。彼れの視線は屢夫人の面から外れて、その後ろに立ちながら今しも衣裳を脱ぎかけてゐる少女たちの方に注がれた。勿論彼れは、前にも斷わつて置いた通り女好きの男ではないのだが、少くとも其の少女等の姿には何か夫人の持つて居るものと正反對のもの、――「純眞」の美しさとでも云ふべきものがあるやうに思へたから。云ひかへれば其處には扮裝と云ふ虛飾を剝いだほんたうの美しさが、處女の肉體の淨らかさが、鬘を脱ぎ、羅衣を脱ぎ、タイツを脱ぐに隨つて、たとへばまだ日の目を見ない蕾の花びらを發いて見るやうに、潑剌とした生命の神祕を輝かして居たのであるから、

―― 凡そ俳優の樂屋生活と云へば、花やかな舞臺の幻影を裏切るものであり、一度それを見た物にお座が醒めるほど醜惡な感じを起させるのが普通ではあるけれども、しかし斯かる少女に於いては例外であつて、彼女等は他の俳優等が淺ましい正體を曝露する時に、最も強く其の

美を示す。それは實に十五六歳から十八九歳迄のうち若い女優のみが持つ特權だと云はねばならない。彼女たちは何故に噴水の如く溢るる多量の髪の毛を鬘で隱し、天鵞絨の如き艶ある肌へ脂粉を塗るか？ それはただ命ぜられた役割を演ずる爲めで、決して彼女たちをよりよく見せる仕方ではない。彼女たちが芝居と云ふ幻影の世界へ現はれる時、觀客は徒らに眩ゆい粉飾に惑はされて其の底に潜む純眞なものの價値を認めぬ。が、斯かる少女の貴さは一と度び舞臺を退いて樂屋へ這入つた時、幻影の世界から現實の世界へ一歩一歩、一枚一枚その肉體を移し入れる刹那にある。たとへば汗で汚れ落ちたお白粉の跡に顫へ戰く潔白な皮膚、パサパサに乾涸らびた口紅の割れ目に生き生きと蠕動する柔かな脣、眞黑に塗り潰された黛の下から絹絲のやうにきらきら光る優しい眉毛、毒毒しい隈取りの奥から無邪氣な笑ひを滴らさうとする愛くるしい瞳、―― 此れこそ「虚飾」の埃を拂つて掘り出された寶石であり、舞臺の幻影と樂屋の現實とを一身に具備する女神であり、夢と眞の二つの境地を彷徨する妖精である。

夫人の話が縷縷として盡きない間に、南の頭を往來したのは其の可憐な妖精等の印象であつた。凡そ虚僞に類する事を極端に嫌ふ結果、芝居と云ふものを餘り好かなかつた彼れは、今夜

圖らずも不思議な劇場の裏面を見せられた譯であるが、しかし彼れは其の少女たちの美しさに蠱惑されるよりは寧ろいたいたしい感じを受けたと云ふ方が、或は適當であるかも知れない。なぜ彼女たちは此れ程清く貴い若若しさを持ちながら、知らない男の居る所で臆面もなく、着物を脱ぎ、肌を曝したりするのだらう。さう思ふ時南はたまらなくなつて其の燦爛たる光の前に眼を潰つた。さうして、又、なぜ彼女たちはつやつやしい肉體を下司張つた化粧で穢し、すずしい眸を不愉快な墨で隈取つたりするのであらう、―― さう思ふ時彼れの「芝居」に對する反感はますます募つた。

「それぢや失禮します。大變お邪魔しました。」

梧桐が風呂から歸つて來たのを好い潮にして、南はさう云つ立ち上つた。

「僕は此處で失敬するよ、少し用があつて跡へ殘るから。それにすつかり酒が醒めてしまつたんでね。――」

梯子段の下まで送つて來た服部は、つまらなさうな顔をしてそんなことを云つた。

「―― だが樂屋の感想はどうだつたね？ 外の者は兎に角梧桐は惡くないだらう。」

「うん、まあ今度ゆつくり話すとしよう。ところで此れは ——」

南は五圓札を出して其れを服部に握らせながら、

「此れは先の洋食と酒の代だ。僕が奢ると云ふ約束だつたんだから、取つて置き給へ。」

二人が札の遣り取りをするところを、梯子段の上から默つてぢつと見て居たのは薫だつた。

彼女は風呂場へ行かうとするらしく、服部と擦れ違ひに下へ降りて薄暗い蔭にぼんやりイみな

から、又其處でコツソリと南の後ろ影を眺めた、

第四篇　深夜の人人

第一章

服部がずつと以前から抱いて居た眞珠に對する好奇心、――眞珠の身に纏ふ或る不可解なものに對する疑ひは、此頃になつてだんだん強くなるばかりだつた。それは南から上海の出來事を聞き、梧桐から最近の樣子を話された爲めでもあるが、しかし彼れに云はせるとそれらは單に表面の事實に過ぎないので、彼女を包んで居る濃い謎の雲は、寧ろ其の奥の一層深い所にあるかのやうに思へた。彼れが眞珠を疑ふのはその性格や行動に關してではなく、彼女の生命、彼女の存在その物に根ざすところの不思議にあつた。――が、それを物語る前に、梧桐に依つて發見された最近の樣子と云ふのは何であるか、彼女に就いて彼れが服部に話したのはどんな事であつたか、その前後のいきさつを玆に一と通り書き記して置かう。

眞珠が梧桐の家に寄寓して居て、總子夫人や薫などと枕を竝べて一つ部屋に睡りながら、夜な夜な何處へか脱け出すと云ふ奇怪な事實は、既に讀者も知つて居らるる筈である。だがそれ

に就いてもう一つ奇怪なのは、一體いつ頃からそれが始まつたのかは明瞭でないにしても、ついこ三日前まで誰れも家中の者が氣が付かなかつたと云ふことである。さうして而も其れを見附け出したのは、最も寢坊で彼女から隔たつた室に睡つて居る梧桐であつた。斷つて置くが梧桐の家は淺草諏訪町の河岸通りにあつて、吾妻橋の方から鰻屋の前川の先を五六軒行つた所の小じんまりとした洒落た住居だつた。裏手が直ぐと大川の水に面して建てられたさう云ふ家の作りは何處も同じやうに、往來からは二階家であるが中に這入ると川縁の方が三階になつて居て、その三階の八疊が梧桐の部屋、二階が玄關と客間と臺所と女中部屋、一番下が總子を始め三人の女優の部屋になつて居たのである。で、此の場合餘計なことではあるけれども、總子が「賢夫人」と云ふ評判を取つたに就いては、斯くの如き夫婦の生活の仕方、―― 夫は見晴らしのいい明るい座敷を獨りで占領しながら、妻は其處から梯子段を二つも降りた地下室も同樣な場所に、女優の監督と云ふ名義を負はされて押し込められて居る事が、のみならずその虐待をぢつと堪へ忍んで常に忠實に仕へてゐると云ふ事が、重な原因であつた。彼女の何か生理的の缺陷を暗示するやうな青膨れのした血色や、落ち着きがあるとは云ふもののイヤにしんみり

した元氣のない態度は、其處に胚胎して居るのだと思はれても居たし、實際もさうに違ひなかつたであらう。彼女がその忍從の德で嫉妬を裏(つつ)み謙抑の衣で聰明を蔽うて居るのを、陰險だと云つてけなす者もないではなかつたが、それは事情を知らない少數の人人で、多くの者は彼女に同情を寄せ敬意をさへ表した。若し梧桐が勢威隆隆たる新劇界の魔王でなかつたら、いくら輕薄な芝居道の出來事にもせよ恐らくは其の爲めに人氣を失つたかも知れなかつた。梧桐自身もそれを氣にして居た證據には、人前ではめつたに女房の惡口を云はなかつたし、樂屋ではいつも「總子さん」と呼んで相當に顏を立ててやつて居たし、家庭でも改まつた客があると手の裏を返すやうに大事にして見せたものだつた。實際彼れが今日の名を成す迄には、彼女が俳優としての働きは勿論妻としての內助の功も決して少なくは薄かつたので、彼れも滿更世間體ばかりでなく或る點に於いて其の人格を認めて居たことは確かである。「己の女房はシツカリした偉い女だ、貞淑な妻だ、しかし彼奴は色慾の相手にすべき者ではなく事業上の相談役にすべき女だ。己の片腕として仕事をやらせれば其れで彼女も滿足していいのだ。」―― 蓋し梧桐の腹の中は斯うだつたのである。さうして又、もつと適切な彼れの心持ちを云へば、彼れは夫人の

底の知れない忍従と薄氣味の悪い謙抑と、それらの間から折折閃めくことのある鋭い理智と拔け目のない利害の打算とに對して、一種云ひ難い恐れをさへ感じて居た。夫人の顏を見ると彼れの胸先へ込み上げて來るものは、或る冷やかな、「死滅」から來るやうな寂しい陰鬱な氣持ちだつた。「お前は熱情がなくていかん。」さう云つて彼れが屢次攻擊した通り、梧桐の最も厭がつたものはそれだつた。が、厭であればあるだけ、やはり彼女の聰明と嚴格とには信賴しずに居られなかつたので、樂屋の取り締まりから家庭に於ける女優たちの監督までを、一切彼女に任せ切りにして安心して居た譯なのである。

しかし、夫人が梧桐から託された女優の監督に就いては、二重の意味があつたことを玆に注意して置かねばならない。なぜなら其れは梧桐以外の誘惑に對する監督であつて、彼れ自身はもとより絕對權力を振ふ暴君であつた。彼れの三階の座敷へは、夫人は餘り顏を出すことを喜ばれなかつたに拘はらず、彼女の取り締まりの下にある眞珠だけは自由に其處へ出入した。尤も、それは大概劇場へ出勤する前の朝の時間で、梧桐に呼ばれると眞珠はいつも嬉しさうな笑顏を見せてイソイソと梯子段を駈け上つて行き、降りて來れば又平氣で薫を相手にはしやいで

居るのだつた。

「みんな先生を恐い人だつて云ふけれど、ちつとも恐いことなんかありやしないわ。わたしが行くといつでもニコニコ笑つてるのよ。だから構はず三階へ押しかけてツてやるの。」

眞珠はそんな事を自慢にしてよくしやべつた。それほど彼女は無邪氣なのであらうか、或ひはそれほど無邪氣でなかつたのであらうか？ 此の疑問は毎日のやうに彼女の素振りを目擊して居る人人にすら、容易に解くことの出來ない謎だつた。無邪氣だと思へば何處迄も無邪氣に見え、狡猾だと思へば何處迄も狡猾に見えた。

三階へ行つていつもは十分か二十分で降りて來るのに、或る朝眞珠は例になく長い間戻つて來ないことがあつた。薫は別段氣にも留めないらしく下の部屋で新聞を讀んで居たが、やがてどうしたのか其の眼はぢつと一つ所を見詰めたまま動かなくなつて、ポタポタと涙が紙の上へ落ちた。

「薫さん、お前どうかしたの？」

さう云つて總子が驚いて聞いた。薫は新聞を讀む振りをして先から泣いて居たのである。

「どうしたの、何を泣いて居るの？ 譯を云つたらいいでせうに。」

―― でも、薫はただ泣くばかりだつた。

「あたしにはお前の泣く譯が分かつて居る。」

と、暫らく立つてから總子が云つた。

「だけどそんな事を思つちや眞珠さんに惡かないかい？ あの兒はお前に泣かれるやうなことなんかありやしないよ。あたしはあれを信じて居ます。あれはそんな人間ぢやありません。」

薫は涙の中から清く透き徹つた夫人の眼を見た。その二つの瞳が持つところの神神しい迄に冴えた安らかな光は、彼女を怪しい悶えから救ひ出すのに十分であつた。彼女はその眼を疑ふことが出來なかつた。さうしてそれからと云ふものは眞珠を固く信じてしまつた。

斯くて、元來ならば風波の絶えない筈である梧桐の家庭は、夫人の賢い取り計らひと、それに懐いて居る二人の少女の睦まじい友情とで、主人の「暴君」との折り合ひもよく圓滿に收まつて居たのであつた。芝居がハネるのは大概十時から十一時前後、時とすると稽古の爲めに一時二時になることもあつたが、眞珠と薫とは出るにも歸るにも夫人の側を離れるやうなことは

なく、劇場から諏訪町の家まで七八町の間を、ぶらぶら歩きながら連れ立つて行くのだつた。たまには歸り路に何處ぞのカフェへ立ち寄つたりしたけれども、それとても梧桐夫婦がつれて行くので、外の者とそんな所へ出入することは堅く禁ぜられて居たのである。で、歸つて來れば主人は三階へ上つてしまふし、他の三人は川縁の地下室に床を竝べて、何かその日の出來事などをしやべり合ひながら、やがてすやすやと寢入つてしまふより外に用はなかつた。

「地下室」と云ふと、讀者は或ひは西洋風の穴藏を聯想するかも知れないが、實際その部屋は表の道路より下にあつたばかりでなく、座敷の感じよりは穴藏の感じがするところの、兩側を厚い壁で仕切られた、天井の低い、纔かに川に面した方の高い窓から明りを取つて居る、陰鬱な場所だつたのである。そこは嘗て風呂場に使はれて居たのを、梧桐が住むやうになつてからほんの少し手入れをして、―― と云ふのは床へ疊を敷いただけで、三人の寢室に充てたものであつた。若しその部屋に寢泊りする者が花やかな女優たちでなかつたら、さうして其處に彼女たちの持ち物にふさはし箪笥だの鏡臺だのが置いてなかつたら、その夥しく濕氣を含んだ壁の色や、而もその壁がところどころ剝げ落ちて居たり、煙突の跡に煤がこびり着いて居たりす

る様子などは、恐らく一層陰鬱に見えたであらう。それに、廣さもやつと四疊半に三疊しかなかつたし、三疊の方には今も云ふ通りいろいろの持ち物が据ゑてあつたので、三人はぎつしり布團を竝べて敷かなければならなかつた。その布團の竝べ方は、一番出口へ近い方に夫人が寢、その次ぎに眞珠が寢、一番川の方へ寄つた所の、窓の下に薫が寢る。此の順序は長い間の習慣になつて居て、いつも狂ふことはなかつたのである。それには別に理由と云ふほどのものはなかつたけれども、最初さう云ふ順序にしたのは夫人の發議であつた。薫が充てられた位置は、その窓の外の石崖の直ぐ下まで大川の水が寄せて居て、夜が更けると其處を漕いで通る艪の音が聞える。そのぎいぎいと云ふ靜かな響きが、夫人は耳について寢られないと云ふので、――たださへ彼女は寢つきの悪い方だつたから――一番川から遠い所へ自分が寢て、最も寢つきのいい薫を窓の下へ寢かした。全く薫は寢つきのいい兒だつたので、つい今しがたしやべつてゐたかと思ふと、ぢきに好い心持ちさうな微かな息を立てながら、折折飛んでもない寢言を云つて二人に笑はれたりするのだつた。

「ゆうべも薫さんはをかしな寢言を云つてたわね、ほんたうに暢氣さうで羨ましい。」

夫人はよくそんな事を云ひ云ひして、寢つきの悪いのを苦にして居たが、近頃ではだんだん不眠症が昂じて來て、寢しなに必ず催眠藥を飲んで居た。然るに、ちやうど今から十日ほど前の晩に、夫人はふと、どうも出口に近い方は明け方になつて表を車が通るもんだから、それで眼が覺めるのかも知れない、と、さう云ひ出して、その夜から布團の順序を少し取り換へて見た。今までは眞珠が眞ん中で、その右に夫人が寢て居たのを、今度は夫人が眞ん中になつて、出口の方へ眞珠が寢た。「きつと此の方が工合がいいかも知れない、試しに今夜だけ斯うやつて見よう。」――などと云ひながら夫人は何氣なしにさうしてしまつたのである。

その出來事があつたのは、薫が眞珠のことを氣にして泣いた彼の日の晩だつた。勿論其れと此れとの間には何の關係もない筈ではあつたけれども、薫はなぜか、夫人がそれを云ひ出した時さつと顏を紅くした。それは薫自身にも、自分の心にそんなものがあらうとは今迄夢にも知らなかつた不思議な感情だつた。――夫人がさうしたのは、夫人だけの都合からではなく、そこに或る懸念が潜んで居たのではなかつたか？　薫と眞珠とを隣り合はして寢かして置くことは、何かしら良くないと云ふ者があつたのではないだらうか？　薫はそんな風に氣を廻して

見て、夫人が恨めしいやうな、極まりの悪いやうな氣持ちがするのを、我ながら怪しまずには居られなかつた。もう今夜からは眞珠の側へ寢られなくなつたと云ふ事實、それが齎らすところの云ひやうのない深い悲しみ、彼女はそれを思ふ時に、自分が今迄いかに眞珠を愛して居たかを、始めてはつきりと覺つたのである。いかに彼女は、地下室の毎夜の時間を樂しく感じて居ただらうか、眞珠の横顔を眺めながら安らかな睡りに入ることが、どんなに嬉しかつたであらうか、その喜びは彼女に取つて幸福なものの總べてであつた。彼女は屢次、友情と云ふものがこんなにも人を幸福にさせていいのであるか、眞珠の側に居ることがこんなにも樂しくつて差支へないのであるかと、さう疑ぐつたくらゐだつた。彼女はそれを惡い事だとは考へない迄も、その樂しみが餘りに自分を醉はせるために時時はそれを怖れた。まうして少くとも、人に云はれない祕密な事として胸の奥に隱して居た。で、彼女が顏を紅くしたのは、强ひて說明を求めるとすれば、大方その心の祕密を覗破されたと思つたからであつたらう。實際夫人の理智の働きはそれほどに鋭い場合があり、薫は殆んど迷信的に、彼女の非凡な洞察力に敬服もすれば畏懼しても居たのであるから。

けれども又、夫人が祕密を見拔いたとしても、薫の淸い樂しみを妨げる理由が何處にあらうぞ！ それはただ單純な祕密であつて、祕密なるが故に惡いとは云へない。たつた一人の友に對する兄弟にも增した愛情、それがどんなに濃やかであらうとも、濃やか過ぎて惡いと云ふ譯はない筈である。まして夫人はあの通り親切な人だのに、そんな思ひやりのない事をするだらうか？「いや、いや、そんな事がある譯はない、やつぱり私の邪推だつたのだ。あんまり幸福過ぎたので、その幸福を取られた爲めに飛んでもない邪推をしたのだ。何も私の事なぞは御存知なしに、お寢られない爲めにさうなすつただけなのだ。假りにも奥さんを恨むなんて、私はまあ何と云ふ馬鹿な女だらう。」―― 悧巧な薫は、やがてさう云ふ風に考へ直さなければならなかつた。いづれにしても、夫人が其の監督の下にある可憐な少女たちの不爲めを謀る筈はないのだし、車の音が耳につくと云ふ理由も、決して通り一遍の口實ではないのだつた。なぜかなら、あの諏訪町の道路は人も知る如く馱馬の往來の頻繁なところで、おまけに地盤が柔かいせゐか荷車の通る度毎に可なり地響きがしたのである。彼女は位置を取り換へてからはいくらかおちおちと寐られるやうになつた。さうして、薫には氣の毒であるが、結局その順序が新ら

しい習慣となつてしまつた。

で、上述の如き次第であつたにも拘はらず、眞珠は夜な夜な誰れの眼にも觸れないで、部屋を脱け出す事に成功して居た譯なのである。さうして又、それを梧桐が發見したに就いては、左に記すやうな事情があつたのである。——

梧桐は不斷から、いついかなる場所にでも横になりさへすれば直ぐに鼾聲雷の如くに寢てしまふことを、（その鼾聲は鼻が悪いせゐであつた）自慢にして居る男だつた。「人間は此れでなくちゃいかん。用の間に五分でも十分でもぐつすり寢られるやうでなくつちや、とても忙しい仕事なんか出來やしないぞ。偉大なる事業家はみんな昔から斯うだつたのだ。」——それが梧桐の口癖であつた。しかし彼れのは用の合間に寢るばかりでなく、普通の人が寢る時間にも普通以上にぐうぐうと寢た。一旦床に這入つたが最後、ちつとやそつとの地震ぐらゐでは容易に眼を覺ましはしなかつた。然るにその梧桐が、二三日前の晩に、珍しくも夜中にふいと眼を覺ました。さうして何と思つたか、足音を忍ばせながら地下室へ降りて來たのである。

それはちやうど午前三時頃であつた。梧桐は梯子段を降り切つたところに暫く息を殺してイ

みながら、縱かに川通りの窓の方から水に反射する夜の明りが、ほんのりとさして居るうす暗い部屋の中を視詰めて居た。最初に彼れは、——布團の順序が變更されたことを知らなかつたので。——一番自分の足元に近い方に睡つてゐる筈の、夫人の寢息を窺はうとした。と、その布團は、人がもぐつて寢て居るやうな恰好に、枕の上まで夜具がすつぽりと蓋さつて居て、その隣りに夫人が心地好げな寢顏を仰向けにして、長い體を眞っ直ぐに伸ばしつつ熟睡してゐたのである。此の行儀のよい端正な寢姿は彼女に特有なものであつて、梧桐はいつもそれを見ると、打つ倒れた彫像に對するやうな殺風景な氣持ちと、「寢てまでもいやに取り澄まして居やあがる」と云ふやうな反感とを抱かせられるのであつた。のみならず、すやすやした寢息が聞えれば聞えるほど、ほんたうに寢て居るのかどうか分つたものぢやないと云ふ風にも思へた。それから彼は向うの端に睡つて居る薫の樣子を窺つた後で、そつと眞珠の夜具に觸れて見た。

「はてな、便所へ行つたのぢやないか知らん、……」

ひよいとさう思つたが、いつ迄立つてもその空ッぽの布團の主は戻つて來ない。梧桐は何事かを深く考へ込んで二三度梯子段を上つたり降つたりしながら、何故か夫人を起して聞いて見

ようとはしないのだつた。凡そ三十分ぐらゐの間、彼れは默つて空ッぽの布團の上に眼を注いだまま突つ立つて居た。それから、恐ろしい興奮を强ひて抑へつけて居るかのやうに鼻息を荒らげながら、すうッと梯子段を上つて、三階の部屋へ戻つて、知らん顏をして寢てしまつた。

その明くる晩もその明くる晩も、さう云ふ事が三日ばかり續いた。いつも夜中の三時頃になると、きつと梧桐が地下室へ降りて來る、夫人と薫とはぐつすり眠つて居て何も知らない、眞珠の布團は空ッぽになつて居る。梧桐は暫く其處に立ち盡して、やがてこつそりと三階へ上つて行く。さうして朝になると、眞珠はちやんとその部屋に居て、夫人や薫と一緒に起きて來る。まるで何事もなかつたかのやうである。その惡夢のやうな出來事を、梧桐は三日の間誰れにも云はずにぢつと堪へて居た、が、四日目の晩になつて、彼れの焦慮は不安の度を通り越して恐怖に近いものとなつた。

「こんな奇怪な事件があるのに、此の女は平氣で寢て居る。」

――彼れは、安らかな夫人の寢顏を見ると覺えずかッとなつた。しかし其處には薫が居るので、今にも破裂しさうな癇癪をぐつと壓しつけて、燃え上る怒りを顫へる指先に集めなが

ら出來るだけ靜かに彼女を搖り醒ました。

「――？」

半身を起した夫人は、空ッぽの布團を指してゐる梧桐の手の方向に氣が附いたとき、さう云ふやうな眼つきをしてちよいと首を傾げたが、寢惚けて居たのか其れとも外に譯があつたのか、その樣子は相變らず落ち着いたものであつた。若しそんな場合でなかつたなら、梧桐はいきなり横ッ面へピシリッ！と一つ喰らはしたところだつたであらう。

「少し話がある、此方へおいで。」

彼れはさう云つて、夫人を二階の臺所の隅へ連れて行つた。

「あれを、お前は知らずに居るのか？」

梧桐の低い囁きの聲は、ややともするとそれが忽ち激しい怒罵に變りさうであつた。夫人はしかし、その鋭い語氣に對しも極めて冷然とした態度で、寢起きのせゐか一層のつぺりと青ぶくれのした顏の筋を、微塵も動かさずにまじまじと夫の瞳の中を視詰めた。

「眞珠は一體何處へ行つてるんだ。あんな事があるのを今迄どうして氣が附かずに居たんだ。」

「まあ、希代ですこと！ ―― ほんとにどうしたと云ふんでせう、今時分何處へ行つちまつたんでせうか？」

だが、夫人は何か外の事を考へて居るらしく、その驚きはほんの口先だけのやうにしか取れなかつた。―― それは夫人の悪い癖だつたので、彼女のやうに氣むづかし屋の夫に仕へたり多くの役者たちを操つたりして居れば、自然と其處に技巧的なところが出來て來るのであらうけれども、兎に角彼女の表情や物の云ひ振りには、本心からか上ッ面なのか分からないやうなわざとらしさが、常に附き纏つて居た。さうして其れが、喜怒哀樂を色に現はさない賢夫人たる所以であつたと共に、梧桐を始め劇團の俳優どもに一種の畏怖を抱かせる武器ともなつて居た。

「何處へ行つたんでせうッて、それを知らずに居る法があるか。何だお前は？ 何の爲めに着いて居るんだ？」

「ほんとに申譯がありません。實は此の頃睡眠劑を飲んで居るので、すつかり寢込んじまつたもんですから、……」

「いくら寢込んじまつたッて、隣に居るのが分らない奴があるもんか。それも今夜ばかりぢ

やないんだ、己は此れで三日も續けて見て居るんだ。」

「それぢやあなた、なぜ早くさう仰つしやつて下さいませんの？」

梧桐はそこへ來てぐつと詰まつた、太い青筋の立つた額からは汗がタラタラ流れ落ちた。が、依然として冷やかに自分を視詰めて居る夫人の眼を見ると、强ひて弱みを示すまいとするやうに、一と入語氣を荒らげずには居られなかつた。

「そんな事はどうだつていい、そんな事よりか己は貴樣の責任を糺して居るんだ。貴樣がある の兒を預かつて置きながら、何處へ行つたか知りませんで濟むと思ふか？ さうして己が叱言を云やあ、その通りいけ酒あ酒あとして居やがる。」

「ほんとに申し譯がありません、……」

さう云つて、夫人は徐ろに項を垂れた、同時に彼女はやつと聞えるくらゐな聲で附け加へた。

「でも、あの兒の居ない事は、あなたが御存知なんだらうと思つたもんですから、……」

「馬鹿ッ。」

急に、夫人の瞳には、涙が一杯に浮かんだ。活氣のない、人形のやうに物靜かな顏の中に、その涙だけが生きて動いて居るかの如く頰を傳はつて縷縷として流れた。彼女は再び頭(つむり)を擧げて、今度は哀願するやうな眼つきで、默然と夫を見上げたのである。

長年連れ添うた女房でありながら、夫人に斯う云ふ態度を取られるとき、梧桐はいつも此の女の氣心を解しかねるのであつた。彼女は何故に泣くのであるか？ それは何の爲めの涙か？ 梧桐にはその意味が極端な善意にも考へられ又その反對にも考へられた。云ふ迄もなく、彼女はそれで自分の貞女振りを示した積りなのであらう、「私(わたし)はあなたが眞珠さんを可愛がつていらッしやるのをよく知つて居ます。ですから眞珠さんが脫け出すのに都合がいいやうに、わざと布團の順序を取り換へて置いたのです。さうしてあなたが安心するやうに、催眠劑を飲んで寢たのです。どうか私の心やりを察して下さい。此れ程にして居る者を、そんなに叱らないで、たまには憐れんでやつて下さい。」―― 彼女の眼つきは、それを訴へて居るやうにも見える。妬ましい事や口惜しい事の數數を胸に收めて、ぢつと辛抱して泣いてゐるいぢらしいその姿は、飽く迄も夫の犧牲となり、奴隸となる事に滿足して居る貞女の鑑のやうにも見える。し

かし梧桐は、その貞女振りに對して二重の疑惑と懊惱とを抱かせられた。彼の頭の中には、それらのものが底の知れない深さを以て眩しく渦を卷いた。第一に彼女は、眞珠が居なくなつた事を知らなかつたと云ひながら、內內知つて居るらしい樣子である、知つて居るばかりか、何處迄も眞珠は三階に隱れて居るのだと、さう信じ切つて居るかのやうである。でなければいくら物に動じない女にしても、此れほど不思議千萬な出來事が起つたのに、あんなに落ち着いて居られる筈はない。さう思ふと梧桐は、痛くない腹を搜られたばかりでなく、多少痛い所もあつただけに、一層彼女の惡推量が忌ま忌ましくてならなかつた。が、問題は單にそればかりでなく、梧桐の方には更に夫人の裏を行く惡推量があつた。―― 彼女は果してほんたうに眞珠が三階に居るものと確信して居るのだらうか？ それとも或は、確信して居るかの如く見せかけて、その實彼女を何處かへ隱して居るのではないか？ ―― 此の疑ひは、（少くとも梧桐に取つては）滿更理由のないものとは云へなかつた。なぜかなら、眞珠が決して三階に居るのではない事は、今夜の梧桐の素振りから推して、餘りに明らかな事實だからである。梧桐は何の爲めにわざわざ夫人を起しに來たか、自分で眞珠を匿まつて居るとしたら、そんな馬鹿な眞

似をするだらうか？ ―― 聰明を以て聞えて居る總子に、その邊の事が分らぬ譯はない。梧桐は彼女が、薫と眞珠だけは外の女優とは特別にして、親身の妹のやうに愛して居るのを知つてゐた。せめて此の二人だけは夫の毒手に罹らせたくないと、さう願つても居るだらうと察した。いやそればかりか眞珠が或る事を彼女に訴へると云ふやうな場合をも、決して想像出來なくはなかつた、「先生がいろんな事を仰つしやるのでほんとに困つてしまひます。夜が心配で仕樣がありません。」さう云つて眞珠が總子に泣き着くとする。總子はそれを見るに見かねて、勿論嫉妬からではなく少女の貞操を庇護する目的で、彼女を夜な夜な何處かへ逃がしてやつたとする。萬一それが見附かつたとしても、夫はそれに就いて餘り嚴しく糺彈する事が出來ないだけの弱味を持つてゐる。「わたしは睡眠劑を飲んで居るのですから何も知りませんでした。」さう云つてしまへば、夫はそれ以上妻を追究することは出來ない。夫人のした事は其處まで考へた結果ではないだらうか？ 梧桐の疑ひは、更に薫の上にまでも及んだ。彼奴も大方グルになつてやつた仕事だ、みんなで己を欺して居るんだ、みんなが眞珠を庇つて居るんだ、餘計な事をしやあがる！ 梧桐の怒りは戀路の邪魔をされた事と、それに對して文句が云へない地位

に置かれた事との爲めに、一層強く燃え上つた。彼は見す見す豫め仕組まれた夫人の罠に陷つたやうな心地がした。のみならずそんな皮肉な方法で夫を翻弄しようとしながら、自分は何處までも貞女面をするずうずうしい總子のやり方が、腹の底から憎らしかつた。それが強ち不良な動機から仕組まれたのではないだけに、尙更その憎みは激しかつた。

「さあ眞珠を出せ、彼奴が何處へ行つちまつたかは貴樣は知つてるに違ひないんだ。さあ云へ？ 白狀しろ」

幾度かさう云はうとして梧桐は、それでもやはり彼女の涙に或る程度迄の信用と憐憫とを感ずるのだつた。その上彼れは平素から好人物扱ひにされて居るので、成るたけ夫人に馬鹿にされまいとする意地があつた。惡く氣を廻して笑はれてはならない、迂濶な事を口走つて夫人の鍊に懸つてはならない、事に依ると此の女は、己が眞珠にどのくらゐ惚れて居るかを試して居るのだ。―― 彼女を疑ふ心の傍からさう云ふ用心が彼れを引き留めた。それに又、假りに總子が眞珠を何處かへ隱すとしても、果して何處へ隱し得るだらう。こんな夜更けに、此の家以外の何處に彼女を預け得るだらう。そんな馬鹿馬鹿しい事はてんで問題にもなりはしない。そ

れを疑ふのは自分が如何に眞珠の爲めに夢中になり、如何に總子を恐れて居るかを、サラケ出すやうなもぢのやないか。考へれば考へるほど、總べてが梧桐には不可解であつた。默つてさめざめと泣いて居る夫人の顏を眺めて居るうちに、物狂はしい疑惑の雲が後から後からと彼の腦裡に塞がつて行つた。突然彼女を打ん擲つてやりたいやうな發作に驅られるかと思ふと、次ぎの瞬間には彼女の前に跪いて、「どうかほんたうの事を云つてくれ」と賴みたいやうな風にもなつた。「己には何も分らない、己は氣が違つたのぢやないか知らん？」彼れはぞつとして身を顫はした。不意に眼の前が晦くなつて、自分の體が足元の地面と一緒に、ヅシーンと沈んで行くやうな氣持ちがした。

彼れは兎も角も一應夫人の疑念を晴らす爲めに、彼女を三階へ連れて行つた。そこにも眞珠が居ないと云ふ事が明かになれば、いかな彼女でも少しはびつくりするだらうと、梧桐はそれを豫期して居たのだが、不思議にも總子は別段驚ぐ色を見せなかつた。「まあどうしたと云ふんでせう、ほんたうに何處へ行つちまつたんでせう。」彼女は矢張りその空空しい言葉を繰り返した。

「よろしうございます、きつと此れから氣を付けるやうに致します。もう明日の晩からは催眠劑を飲まないやうにしますから。」

漸く最後に、彼女はさう云つただけであつた。

然るに、その夜の明け方になつて、眞珠は例の如くいつの間にか部屋に戻つて居たに拘はらず、それが何時頃であつたかは、遂に夫人には分らなかつた。夫人はその朝出來るだけ氣を付けて居たけれども、寢しなに飲んだ睡眠藥が利いて居たのと、夜中に起されたので睡氣が溜つて居た爲めに、ついとろとろとしてしまつた。さうして眼が覺めて見ると、隣りの布團に眞珠がすやすやと寢入つて居た。――少くとも、彼女自身が梧桐に語つたところはさうであつた。

「ほんとに今夜からは氣をつけます。夜ツぴて寢ないやうに致します。」

と、夫人は其の時もそんな事を云つて居た。

第二章

眞珠は、梧桐夫婦の間に自分がそれほど問題になつてゐるのを、少しでも氣取つたらしい樣子はなかつた。彼女はその朝も平氣で三階へ遊びに行き、相變らず梧桐の首ッ玉へ嚙り着いたり、膝の上へ腰掛けたりして、狆ころのやうにじやれ廻つた。梧桐もそれをどうする事も出來なかつた。「今日は一つ遠廻しに聞いてやらう。」――さう思つては居たのだが、その決心は眞珠の顏を見ると同時に消えて行つた。その上、眞珠のふさけ方はいつでも妙に執拗い馴れ馴れしいものだつた。それでなくても女好きの梧桐は、さうされると一種抵抗し難い魔力で縛られるやうに感じた。彼の頭を一杯に塞げてしまふものは、もう昨夜からの疑惑でも憤懣でもなく、それよりも強い暴風のやうに荒れ狂ふ情慾だつた。彼れは餌食に飢ゑた獸の眼つきで、しやぶり着きたいやうな眞珠の手足を、さうしてそれが飴のやうにしなしなと彼れの體へ纏はり着くのを、例の鷹揚な態度で享樂しながら、ダラシなく何時間でも空費してしまふのだつ

た。――が、此の事に就いてはいづれ精しく述べるとして、今は其の晩から引き續いて起つた更に不思議な出來事の方へ、直ちに筆を進めるとしよう。

さて、その晩はどうだつたかと云ふと、梧桐は一體今度の事件に關しては、夫人のする事が何となくあてにならないやうな氣がしたのだけれども、「今夜はきつと氣をつけます」と云ふ彼女の言葉に安心したせゐか、いつもの睡り癖が出てつい明くる朝まで一と息に寢徹してしまつたのであつた。で、朝になつてから彼れは總子を三階へ呼びつけてそつと尋ねた、

「ゆうべはどんな工合だつたね？」

「ゆうべは何も變つたことはございません。」

夫人はきつぱりとさう云ふのだつた。

「――ゆうべ私は、わざと寢た振りをしてまんぢりともしないで居ました。あの兒はあれでなかなか氣の付く方ですから、悟られてはいけないと思つて、寢しなに、矢張りいつもの通り催眠劑を飲む眞似をして見せたりしたんですけれど、それに氣が着いたのかどうか、ゆうべはとうとう何處へも行かずにしまつたんです。まあ今夜はどんな風ですか、もう二三日樣子を見

るやうにして見ませう。そのうちに又始まるだらうと思ひますから。――」

「ふん、……」

梧桐は一と言云つたきりで、穴の明くほど夫人を睨み付けて居たが、彼女の冷靜な表情からは何物をも搜り出す譯に行かなかつた。「此の女は謎をついて居る、己を欺して居る。」なぜと云ふ理由もなしに彼れはたださう感じた。此女をあてにして居たらいつ迄立つても分る事ちやない、己が自分で探索しなけりやとても駄目だ。――彼れはイライラしながらさう思つた。彼れの疑ひはますます濃くなるばかりだつた。

しかし、次ぎの晩も、どう云ふ譯か梧桐はウツカリ明くる朝まで寢徹してしまつた。「しまつた！」眼が覺めると同時に彼れはさう云つて飛び起きたが、もう遲かつた。

「ゆうべも別に變つた事はございません。」

――夫人はその朝も同じやうなことを云つた。

「さうかね。」

と、梧桐はさう云つただけだつた。彼れは總子の面を見るのもイヤな氣がした。

三日目の晩に、彼れは時計を枕もとへ置いて布團の上にあぐらを掻いて居た。と、一時近くになつて恐ろしく睡くなつて來たので、今度は床の間の前にキチンと畏まつて坐つた。その床の間には例の「南無妙法蓮華經」の髯題目が懸つて居て、梧桐はそれを念じるやうな心持ちに、ぢーいッと息を張り詰めながら一生懸命に眼を睜つて居た。さうしたまま、三十分ぐらゐは立つたであらう、……一時、一時半、……と、その時分まで彼れはぼんやり覺えて居るのだが、やがて又たまらなく睡くなつて來て、いつの間にかこくりこくりやり始めて、……それから先きはどうなつたかまるで分らなかつた。ハッと氣が付いた時分には、もう夜がすつかり明け放れて、彼れは床框に打つ俯したまま何も知らずに寢て居たのであつた。

「ゆうべも別に變つたことはございません。」

「さうかね。」

その朝も、夫婦は判で押したやうな冷淡な言葉を云ひ交はした。

その次ぎの晩もその次ぎの晩も、結果は常に同じだつた。梧桐の寢まいとする努力は一時間と續かなかつた。きつと、十二時から一時頃になると、意識が朦朧と翳つて來て、頭の中が痺

れるやうになつて、直きに、たわいもなく昏昏と深い睡りに誘はれてしまふ。……ひよつと
すると、此れには何か譯があるのぢやないか知らん？　已は誰れかにどうかされてるのぢやな
いか知らん？　――彼れは總子が睡眠劑を持つて居るのを思ひ出した。彼女が若し、それを夫
に知らせずに飲ませようと云ふ意志があるなら、決してその機會がないことはない。なぜな
ら、梧桐は寢しなに餅菓子を摘まみ喰ひをする癖があつて、毎夜缺かさずにそれを買はせて置
くのだから。先づ芝居から歸つて來ると、三階へ上つてドツカリと腰を据ゑる。それから、女
中を呼んで、床を取らせて、枕もとへ菓子を運ばせる。自分で茶簞笥から菓子皿を選り出し
て、竹の皮包みの菓子を丁寧にそれへ移す。――燒物道樂の彼れは、いろいろの茶器や菓子
器を持つて居たので、そんな事をする間が、一日の勞苦を忘れる樂しい時間なのであつた。
――次ぎには湯加減を見て、徐ろに紫泥の急須へ玉露を入れる。さうして菓子を摘まんでは
玉露を啜りながら、いかにも浩然の氣を養ふと云つた風に、悠悠と愛玩の器物を手に取つて眺
めたりする。それが濟んでから、さていよいよ寢ると云ふ時に、葡萄酒をコップに一杯飲む。
尤も此の葡萄酒だけは睡氣を催す恐れがあるので二三日前から止めにしては居たけれども、そ

の代り珈琲の濃いのを二杯も三杯も飲むのだつた。で、それらの飲食物の孰れかしらに睡眠劑
を混ぜて置くことは、夫人自らが手を下さないでも容易く出來る譯なのである。かりに、眞珠
も夫人とグルになつて居るとする、勝手に三階へ出入する事を許されて居る彼女は、梧桐の隙
を窺つて茶簞笥の中の葡萄酒の罎へなり、珈琲の罐へなり、そつと藥を入れて搔き交ぜて置
く。或は又、あの餅菓子にしたつて細工が出來ないことはない。菓子を買ふのは留守番の女中
の役目ではあつたが、女中と雖もなかなか油斷はならないのである。夫人は不斷から家内中の
者を手なづけて、彼女の方へばかり同情が集まるやうにし向けて居たので、いざと云ふ時に梧桐
の味方をする者は一人もない、恐らくは女中でも書生でも皆彼女の手先となつて働くだらう。
「奥さんのなさる事に惡い事は一つもない。先生に睡眠劑を飲ませるのだつて、それもみんな
先生御自身の爲め、眞珠さんの爲め、役者たちの折り合ひや取り締まりの爲めを思つてなさる
事だ。」奉公人どもはそんな風に考へるだらうし、それに少しは燒餅も手傳つて、總子の云ひ
附けとあればどんな事でもやりかねない。梧桐は此の家の暴君でありながら、その實みんなが
寄つてたかつて彼れを陷れて居る。威張れば威張るほど皆が蔭で舌を出して居る。夫人の采配

の下に、内中が總がかりで陰謀を企て、主人を嬲り物にして居る。――自分は今、そんな場合に置かれて居るのぢやないか知らん？　眞珠の行くへを知らないのは自分だけで、奉公人は勿論のこと、外の役者たちも殘らず知つて居るのぢやないか。劇團全體が總子の味方をして、眞珠を庇つて居るのぢやないか。さうだとすれば、總べての食ひ物總べての人間が悉く怪しい。己は誰れにも、一刻も氣を許すことは出來ない！――梧桐はさう云ふ風に想像を逞しくした。いやに空ッ惚けた夫人の顏を見る度毎に、それが激しい强迫觀念となつて彼れを襲つた。

次ぎには又、かう云ふ事も推測出來るのであつた。――果して自分が睡眠劑を飲まされて居るのだとすれば、眞珠はそれで安心して居る譯であるから、もう此の頃は夜中に逃げ出さないかも知れない。「ゆうべも別に變つたことはございません」と云ふ總子の言葉は、或は事實かも知れない。總子は最初、夫が地下室へ忍んで來るのを恐れた結果、眞珠を何處かへ隱したのである。ところが其れを夫に感づかれたので、今度は夫が眼を覺まさないやうな手段を取つた。さうして其の手段がうまく行つて居る以上、もはや眞珠を隱す必要がなくなつた筈である。さうだとすると、一つ此方でも謀の裏を掻いてやらう。寢たと見せかけて、夜中に不意に

地下室へ降りて行つて、否應なしに眞珠を三階へ連れて來てやらう。――

そこで、或る夜のこと、梧桐はいつものやうに枕もとへ菓子を持つて來させて、わざと下の者へ聞えよがしに茶を入れたり珈琲を煎じたりしたが、その晩はそれらのものを一つも喉へ通さずに居た。果して彼れは一時になり二時になつても、睡くならないのであつた。ちやうど三時が打つた時に彼れは、そうッと梯子段を降りて地下室へ這入つて行つた。――ところがどうであらう！　夫人と薫とは矢張り好い心持ちさうに睡つて居ながら、依然として眞珠の布團は空ッぽであつた。念の爲めに部屋と云ふ部屋を一つ一つ覗き廻つたけれども、彼女の姿は何處にも見出だされなかつた。さうして、梧桐がその邊をみしみしと往つたり來たりしながら、可なりうるさく電燈のスヰッチをパチパチやらせて居る間も、家内中の者は何も氣が付かないらしくしーんと寢鎭まつて居た。梧桐はもう夫人を呼び起して聞いて見る勇氣もなかつた。

「今夜の結果で見ると、自分が睡眠劑を飲まされて居たことは確なのだ、明瞭になつたのは唯それだけだ。」

彼れは、眞珠が未だに何の目的で、如何なる方法で家を脱け出すのであるか？　その問題を

もう一度始めから考へ直さねばならなかつた。事件は今まで想像して居たところとは全く違つたもののやうに見え出して來た。たとへば彼れに睡眠劑を飲ませたのも、夫人が興かつて居るのではなく、眞珠獨りの仕事かも知れない。家中の者が梧桐を欺して居るのではなく、彼れ等の總べてが眞珠に欺されて居るのかも知れない。——そんな風に思はれて來た。

明くる日の朝、總子を三階へ呼び寄せた梧桐は、いつもよりは稍打ち解けた態度で尋ねた。

「ゆうべの模樣はどうだつたね？」

「ゆうべも別に變つたことはございません。」

夫人は矢張り自若とした顏つきでさう答へた。

此の、最後の出來事があつたのは、それがちやうど南が梧桐の部屋を訪ねた其の日の朝だつたのである。

「ねえ君、一體どう云ふ譯なんだらう！　誰れかと妙な關係でも出來て、其奴の處へでも忍ん

で行くのぢやないかとも思ふんだけれど、それにしても腑に落ちない所があるし、兎に角實に不思議なんだ。僕は此の問題の爲めに此の間から散散頭を惱まして居るんだ。」

その晩、南が歸つたあとで、梧桐は服部を奥の萬盛庵へ連れて行つてその話をしたのであつた。

「そりや僕にも分からないが、しかしあの上海でも不思議な事があつたんださうだね。」

「上海で？——」

さう云つて、梧桐はをかしいほど眼を圓くしながら服部の顏を覗き込んだ。

「—— 君はそれを誰れから聞いた？」

「南から聞いたんだよ。」

「さうか、成る程、…… 聞いたら聞いたで仕方がないが、少し譯があるんだから、あんまり人に云はないやうにしてくれ給へ。だがあの事件に就いて南君は何と云つてたね？ どう云ふ解釋をして居たかね？」

「どうと云つて、ただ事實を話してくれただけなんだ。要するに不思議な事件だと云ふ以外

には、何も考へちや居なかつたやうだ。」

「僕はあの事件が日本へ傳はらないやうに、總子と相談して好い加減に揉み消してしまつたんだが、考へれば考へる程どいろいろ不思議なことがあるんで、あの眞相は未だに僕等にも分からないんだ。だがまあそんな事はどうだつていい、あれと今度の事件とは別に關係がないんだから、——」

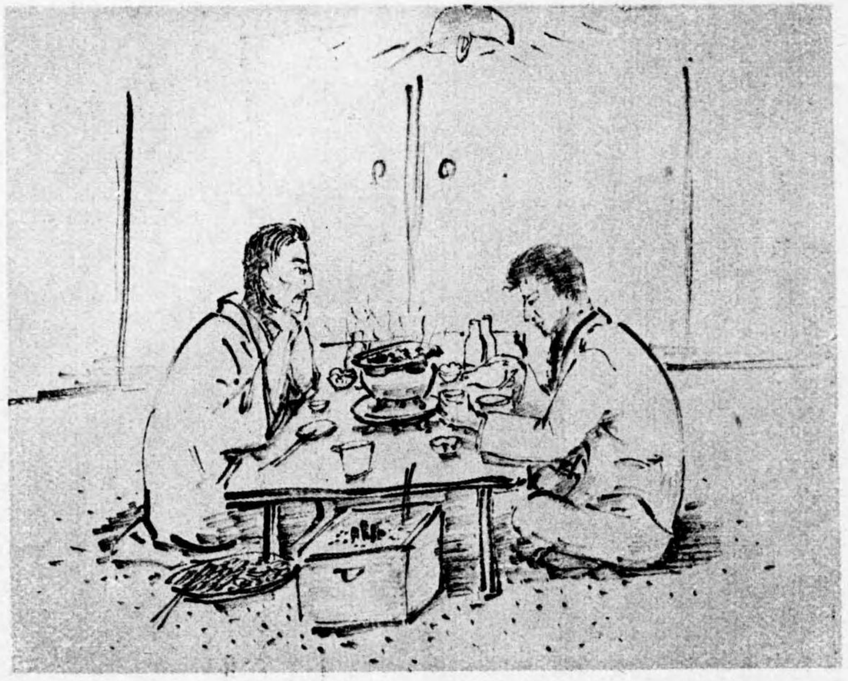
「いや、關係があるかも知れない。」

と、服部が云つた。

「なぜ？」

「なぜッてことはないけれど、僕にはどうもさう云ふやうな氣がするんだ。上海の事件が分からなければ、今度の事件だつて分からないやうな氣がするんだ。」

「まあさ、そんな事を云はないで一つ骨を折つてくれ給へ。あの兒の行く先を突き止めさへすりやあ、事件は明瞭になるんだから。——僕も今夜から一層氣を付ける積りだが、君は僕の家の前に待つて居て、あの兒が出て行つたらそうッと跡をつけてくれ給へ。何しろ今度は總



子の奴までが怪しいんで、君より外に頼む者はないんだよ。」

「僕だつて怪しいかも知れないぜ、僕もあの兒に惚れてるんだから。」

「ほんたうかい？」

梧桐はそんな時に直ぐと眞に受ける男だつたが、その晩は殊に血迷つても居るらしかつた。

「いや冗談だよ。惚れてる事だけは確かだがね。」

さう云つて服部はニヤニヤ笑つた。

第三章

話は少し前に戻るが、ちやうど其の晩の十二時近い時分、恰も梧桐と服部とが奥の萬盛庵で酒を飲んでゐた頃に、仲店の裏通りに於けるチャプリン・バアでは定連の樂屋の人人が寄り集まつて、盛んにメートルを上げて居る最中であつた。

チャプリン・バアは其の名の如く極めて剽輕な元氣な酔ひどれの氣焔を上げに來る場所であつて、バアとは云ふものの勿論淺草式の見すぼらしい居酒屋に過ぎない。そこの上さんが先の亭主を追ひ出して「金公」を後釜へ引き擦り込んだ時分に、即ち以前の萬里軒がチャプリン・バアとなつた時代に、表つきの面目を一新して洋食屋よりはおでん屋に近いやうに直したのであつたが、その生生しい落葉松の白木の造作は、以前よりも一層店つきを落ち着きの惡い、お粗末なものに見せてゐた。讀者は定めし淺草劇場の天井に吊る下つてゐた狹ッ苦しい梧桐の樂屋を記憶せられる事であらうが、あの樂屋を仲店の裏通りへ持つて來て、ぎつしりと詰まつた

家と家との庇間へ押し込んだものと思へば、それで大凡そ其店つきを想像することが出來るのである。實際それはウツカリすると眼に這入らないくらゐな間口の狹い家であつて、誰れが書いたのか「チャプリン・バア」とブツキラボウなゴシック型の文字が記されてある入口の障子を明けると、一方にささやかな土間があつて、其處にはたつた一箇のテーブルと二三脚の椅子が竝べられ、他の一方は上り框の上が四疊半ほどの座敷になつてゐて、チャプ臺が二つ据ゑられてある。チャプ臺の向うの壁には、櫻正宗の酒樽が積んであつたり、廣告のビラが下つて居たりする中に、梧桐寛治を始め多くの役者どもが醉筆をのたくらせた落書きのポンチ繪だのが五六枚も貼り付けられて居る。で、定連以外の客は、大概此の落書きに恐れをなして、それでなくても樂屋ごろつきの空氣に充ちてゐる此の店の樣子を、ちよいと覗いて見ただけで敢て這入らうとする勇氣のある者は少なかつた。さうしていつも夜の十一時から十二時頃になれば、その四疊半の座敷に陣取つてチャプ臺の周りに眞赤な顏を竝べるのは、北斗劇團の人人に極まつて居て、さながら其處が彼等の梁山泊になるのであつた。

その晩も、煙草の煙の濛濛と立ち罩める中に五六人の醉どれが落ち合つて、喰ひ散らした洋

食の皿を前にしながら、頻りに管を卷いて居たが、一番よく飲んでよくしやべるのはピアニストの井口昌吉だつた。舞臺の上で着用するフロツク・コートを着込んだまま、紅い造花の薔薇の花を襟に挿して、だぶだぶした上衣の裾を荷厄介にしながらドツカと腰を据ゑて居る彼れの傍には、髪の毛を長く伸ばしてバカボンド・ネクタイを着けたファースト・ヴイオリンの「由ちやん」と呼ばれる男、酒ツ喰ひで有名な女優の光代、テノル唄ひの垂水清六、バアの主人公兼居候の水木金之助、――その外二三人の役者や管絃楽部員が山賊の山賊のやうにごちやごちや固まつて居た。

「……な、分かつたか？　お前たちやあ何かツて云ふと藝術藝術ツて云ふが、全體何處に藝術があると思ふんだ。今やつて居る『眞夏の夜の夢』があれが藝術か？『マアチヤント・オヴ・ゼニス』があれが藝術か？　あんなもなあ淺草のお客にやあ受けるかも知れないが、藝術のゲの字もありやしねえんだぞ。沙翁劇をやるならもつと眞面目な態度でやれ。あんなこけ嚇かしの茶番のやうな眞似は止しにしろ。もつと眞劍になつて、淺草の民衆を教育してやるのが己たちの使命なんだ……」

「ヒヤ、ヒヤ。」

と云つて、光代は手にした杯の縁からだらしなくボタボタ酒をこぼしながら、横つ倒しに足を崩して片手を美少年の垂水の膝に衝いて居た。が、誰れもそんな事には氣が付かないほど醉つ拂つて居るらしかつた。

「だからもう分かつたツて云つてるからいいぢやねえか。お前は醉ふと理窟を云ふから厭だつてんだ。己たちやあ何も云はずに梧桐寛治を信頼してりや間違ひはねえのよ。寛治だつて結局の所はお前と同じ考へなんだ。な、な、だから其れでいいぢやねえか。……」

さう云つて、ムキになつて昌吉の相手になつて居るのは由ちやんだつた。

「おい、おい、後生だから喧嘩なんかしないでくれよ。」

と、後ろから金公が眼の周りを櫻色にしたおめでたさうな顏を出して、ろれつが廻らないせゐか愈甘つたれた聲で云つた。

「心配するなよ、何も喧嘩ぢやあないんだから、――」

「まあさ、喧嘩ぢやあなからうが、そんな議論なんか止しだ止しだ。なあ、ふんとうにさう

ぢやないか、そんなこたあ今更云はないだつてお互によく分かつてるんだ。何んだい、藝術がどうしたツて云ふんだい。アルス・ロンガ、ギタ・ブレギスが何だつて云ふんだい。へん！今に見やあがれ！己たちの芝居がいくら茶番だつて、茶番で妥協して置いて、それから段段見物を教育して行かうツてえ趣向なんだ。そこが梧桐寛治のえらい所なんだ。世間の奴等が何と云はうと、己がちやんと引き請けたからにや安心するがいいや。」

「止せやい、止せやい、バツクなんぞの出る幕ぢやねえやい。居候の癖にあんまり威張るとお上さんに叱られるぞ。」

「それ、それ、コツク場で眼を光らしてらあ。――ねえお上さん。」

と云つて、垂水はにやにやしながら臺所の方を覗き込んだ。

物を油でいためる音が絶えずシユー、シユーと騒騒しく響いて居る暖簾の蔭の、帳場格子のある所に、その上さんはいつもしどけなく襟をはだけた不恰好な太つた姿を見せて居た。年は金公より十も上らしい三十前後、色の淺黒い、そばかすの多い、貪慾さうな眼つきをした、でつぷりと脂ぎつた圓顔の下ぶた年増で、どうして此の女が先の亭主を追ひ出してまで金公に浮

身を窶したのか、その事件が起つて以來屢次樂屋中の問題になるのだが、谷崎潤一郎の小説を愛讀する井口昌吉の意見に依れば、「金公がマゾヒストで上さんがサディストだから不思議はないのだ。」と云ふ事になつて居たのである。さうして此の觀察は幾分か中つて居るらしく、舞臺で女優たちに頭を擲られる金公は、内でも時時上さんにボカリと喰はされて、「おお痛え！勘忍しておくれツてばよう？」などと意氣地のない所を、わざと大勢の前でさらけ出したりするのだつた。彼れの舌足らずのやうな、低能じみた口の利きやうは、上さんに對する時は殊にひどかつたのである。

「お上さん、あたいにお小遣ひをおくんな。」

さう云つて彼れが甘つたれると、

「何だねお前さん、乞食見たいに手を出さなくつたつて、欲しけりや遣るからいいぢやないか。」

と口叱言を云ひながら、その癖上さんは此の馬鹿げた男が可愛くつて溜らないやうに、いそいそと首にかけた財布の底から幾らかの金を渡してやる。

「どうだい、みんな羨ましいかい、女に錢を貢がせるなんて、己はなかなか色男だらう。」

すると金公は得意になつて、でれりと肩を蒟蒻のやうに搖すつて見せる。とたんに上さんが、

「生意氣なことをお云ひでないよ。薄のろの癖にいい氣になつて居やあがる。」——ぴしやり！と云ふ工合に、平手で頰ッぺたを叩き付ける。「あ痛え！」と云つて、慌てて金公が首を縮める。——斯うして二人は、見て居る者があればあるほど猶更ふざけ散らすのだつた。

「何でえ、己は威張つてなんぞ居るもんけえ、餘計な云つけ口なんぞするなッてことよ。——謔だよ、お上さん」

金公は臺所の方をチラリと見て、さも恐ろしさうに竦み上つて、べそを搔きながら垂水の顏を睨みつけた。

「……そりや己だつて梧桐寛治のえらい事は知つて居らあな。だが彼奴にやあ藝術のこたあ分かりやしねえ。分かつたやうな顏はしてるが、實は何も分かりやしねえ。彼奴のえらいのは世間からえらさうに思はせることがえらいんぢやねえか。要するに彼奴は偉大なるチヤアラタ

ンだと云ふんだよ。」

井口はまだしつツくどく辯じ立てて居た。

「……貴樣はチヤアラタンと云ふ意味を知るまい？ 知らなけりやあ覺えておけ。チヤアラタンてえのは山師ツてことだ。佛蘭西語でシヤアラタンてえんだ。梧桐寛治はつまり一種の山師だつてえ事なんだ。」

さう云つては片手でグビグビとコツプを乾して、片手でハム・サラダを衝ツ突いて居る彼れの樣子は、その奇怪なるフロツク姿と相俟つてどう見ても大道の安藝人であつた。が、此れでも此の男は上野の音樂學校の出身なので、嘗ては帝劇の洋樂部に居たこともあるし、亞米利加三界を放浪して桑港あたりに二三年ぶらつついて居た經驗もあるし、まだ今日のやうにならない時代には有望なピアニストとして矚目されて居た人間だつた。天才肌で、恐ろしい酒飲みの怠け者で、何かと云ふと洋行を鼻にかけながら時時間違つた英語を使つて、その英語以上にアヤフヤな外國の智識を振り廻す無學な男ではあつたけれども、同時に何處かしら名人氣質の率直な所があつて、それが爲めに彼れは多くの人から可愛がられ、未だに昔日の聲望を全く失墜し

てはゐないのだつた。さうして淺草の舞臺へ立つやうになつてからも、彼れが得意とするショパンの演奏は、公園には勿體ないものとして心ある人人の注意を惹いた。醉つ拂ふと無闇に悲憤慷慨して、譯の分からない理窟を捏ねたがる癖があつたのも、さう云ふ過去の經歷と現在の境遇から來る不平の結果だつたのである。

「やあ、失敬、相變らずお盛んだね。」

その時ガラリと表の障子を明けて、闖際にイみながら中を覗き込んだ男があつた。意氣なフレンチ・スタイルの、濃いオリーヴのサック・コートを小太りに太つた體へキチンと纏つて、同じオリーヴの天鵞絨の中折に、銀座の田屋のショウ・ヰンドウにでもありさうな蜥蜴の背の如くぎらぎら光るネクタイへ大きなルビイのピンを挿した、三十二三の色白の紳士で、杯盤狼藉たる一座の樣子を憫れたやうに見廻しながら、ステッキでとんとんと輕快に地面を衝いて居る。

「やあ、來た、來た。」

と、井口は直ぐとさう云つて、そのハイカラないでたちを眼敏くジロジロと眺めながら。

「何だい、そんな所に突ッ立つて何を考へて居るんだい。此方へ來て一杯やつたらいいぢやないか。——尤も此處は、君のやうな紳士の來る所ぢやないんだがね。」

紳士はそれには答へずに、垂水の膝に凭れて居る光代の醉顏を偷むやうに見て、應揚ににこにこ笑ひながら這入つて來た。

「星野先生、入らつしやいまし、先日はどうも、——」

「止せやい、金公、そんなにビョコビョコお時儀なんかするない。もう此處へ來たら先生も糞もありやしないんだ。」

井口は金公をたしなめて置いて、それからぺつたりと紳士の傍へ體を擦り着けて、

「なあ、星野君、さうぢやないか。君と僕とは昔ッからの友達だらう。ねえ、さうだらう。君は今ぢやあ賣れッ兒にやあ違ひないが、何も先生ッて云はなくッたッていいだらう。」

「誰れも悪いッて云やあしないさ。僕は此れでも淺草黨の一人なんだからな。」

「うん、さうか、君あ感心だ。君のやうな小説家が淺草へ眼を付けるなあ感心だ。種はいくらでも供給するから、どうか一つ己たちの事を書いてくれ。己たちなんさあ小説こそ書かない

が、實は君よりもズッと進んだ深刻な惡魔主義者なんだぜ。」

「垂水さん、あたいに其れを一と口おくれ。」

光代は大きな口をバクンと開いて、チキン・ライスを喰つて居る垂水のふつくらした頰ッぺたの方へ、自分の顏を持つて行つた。

「あはははは。」

と、星野はわざとらしい快活な笑ひ方をして、

「僕は君たちの事よりか歌劇を書きたいと思つてるんだよ。世間の奴等は淺草と云ふと馬鹿にするけれど、劇の運動なんてもなあ淺草の樣な所から起つて行かなけりや駄なんだ。僕の考へぢやあ、今に淺草からほんたうの民衆藝術が生れるだらうと思ふんだね。ねえどうだらう、僕に一つ歌劇を書かしちやくれないだらうか。」

「君が歌劇を書く？　そりや面白からう。是非一つやつて見るんだな。一體君たちあ、今迄小ッぽけな文壇なんぞに引つ込んで居たのがよくないんだよ。憚んながら君の前だけれど、僕は今の文士なんて者はみんな馬鹿だと思つて居るね。みんな意氣地のない、ケチの野郎ばかりだ

と思ふね。民衆藝術だの何のと云ひながら、一體どれだけ民衆の爲めに盡してるんだ。己たちなんか疾ッくの昔から民衆の味方になつてるんだぜ。此れで己たちが一つ蹈ん張りやあ、今に淺草から藝術の革命が起るんだ。小說家だらうが俳優だらうが、淺草を輕蔑する奴は殘らず撲滅されちまふんだ。だから君なんぞも、宜しく今のうちから己たちの運動に加はるんだね、己たちを友達に持つた事を大いに光榮に感ずるんだね。ほんたうに君、冗談ぢやないぜ、僕は眞面目で云つてるんだぜ。君が歌劇を書くッてんなら、どうかお書き下さいッて云ふ所だが、僕はさうは云はないね。小說家の癖に感心な奴だ、書きたけりやあ書かしてやるから、名譽だと思つて己たちを奢るんだね。……」

「うん奢るよ、奢るなあ今でも奢つてやるが、歌劇を書くには何か書き方でもあるのかね。僕は西洋音樂の事を一向知らないんだけれど。それでも君、大丈夫だらうか。」

「大丈夫、大丈夫。」

由つちやんが不意にさう云つて横合から口を出した。

「星野先生、是非やつて下さい、書き方なんざどうだつて構やしませんよ。音樂の事なんか

分からなくッたッて、此方で都合のいいやうに直さして貰やあいいんですよ。『星野先生原作』と云ふ名前がありやあ、それでお客が來るんです。ねえ先生、きつとですぜ。書いて下さりやきつとやりますぜ。」

「ふん、面白いぞ、淺草に星野先生の歌劇が現はれるなんて、さうなつて來なけりや、面白くねえんだ。それで一番公園中をどつと引つ繰り返してやるんだ。なあ、どうだい、ちやんと寸法が出來てるぢやねえか。もう斯うなりや氣が強えぞ。」

ぬつと金公は腕を捲くつて、えらさうに鼻の頭を擦つて見せた。

此の星野と云ふ男は、――斯う云ふ人物も淺草名物のオペラ・ゴロツキ、所謂ペラゴロのタイプの一つであるから、ちよつと說明して置くのだが、――二三年前までは名も知れない三文文士だつたのが、近頃財界の好景氣につれて雨後の筍のやうに生れて來た雜誌の爲めに、急にメキメキと賣り出した、當時流行の原稿成金の一人になつて居たのである。井口昌吉とは古くからの顏馴染で、久しい間手紙の遣り取りもしなかつたのに、何んと思つたか此の頃になつてしばしば樂屋へやつて來るのだつた。いつも折目正しい新調の洋服をリユウと着込んで、芝

居の方はロクに見もしないで、舞臺から引き揚げて來る女優の姿をそれとなく物色しながら、四下をぶらぶらとうろついて居る、妙に氣取つた嫌味な男だつたが、それでも文學者を尊敬するのを一つの政略と心得て居る梧桐夫婦から、「先生先生」と云はれて居た。自分では常に「淺草黨の一人」と稱して、此れからの芝居は歌劇でなければならないやうに云つて居るけれど、その癖今も白狀したやうに音樂の事なぞ皆目分らない人間で、實はそれよりも芝居がハネてから役者どもを引つ張つて何處かのカフェへ奢りに行くのが、――さうして云ふまでもなく、其の中には必ず一人か二人の女優を誘つて連れて行くのが、內內の目的であるらしかつた。しかし、こんな男に限つて、イヤに勿體振つて居るので、まだ誰と云ふあても附かずに、甲の女優に半襟を買つてやつたり、乙の女優に洋服を拵へてやつたりしながら、無闇に札びらを切つてばかり居るのである。つまり此の男が公園へ來るのは、成金が藝者を連れて遊山に行くのと大した變りはないのである。勿論札びらを切るとは云つても、たかが小說家の分際で大した事は出來よう筈はないのであるが、そこは又御方便にも相手が歌劇の女優であるから、甚だ手輕に成金振りを發揮することが出來るのであつた。たとへばちよつと晩飯を奢るにしても、彼女だ

ちは藝者と違つて決して無駄な贅澤を云はない。日本近代の産物たる此の愛すべきオペラの人魚どもは、淺草に住みながら恐らく「大金」や「草津」の有難味も知らないであらうし、知つて居たにしろメリンスづくめの氣の毒な彼れ等の服裝は、そんな所へ連れて行つたら却つて哀れを催すであらう。彼等に物を喰はせるのは文字通り腹一杯に喰はせてやればいいのであつて、喰ひでのある幾皿かの洋食と、酒とビールとがありさへすれば、徒らに手數のかかつた料理や座敷は必要でない。だから藝者に取り卷かれて愚にもつかないあぶく錢を使ふ連中よりも、此の星野のやうなベラゴロの方が遙かに賢い遊び方を知つて居る譯で、多少なりとも新しい時代の空氣を感じて居るさう云ふ女優たちの方が、藝者に比べればどんなに正直で面白い「女友達」だか知れないのである。

「どうだい君達、もつと盛んに飲んだらいいぢやないか。」

と、星野はポケットから銀のシガレット・ケイスを出して、ディミトリノをぷかぷかやりながら、大分醉が循つたらしくチャブ臺の下へ足を伸ばして、しかし時時ズボンの折れ目を氣にして居た。

欠

光代はウィスキーをぐい飲みにして、乾したコップをごろごろと壘へ轉がしたかと思ふと、ぐつたり其處へ突つ俯してしまつた。

「ああ醉つた、醉つた、あたいほんとに醉つちやつたわ。こんなに醉つちや歸れやしないわ。」

「時にもう一時だね。」

と、星野が云つた。

「みんな一緒にタキシーで歸らうぢやないか。どうせもう電車はありやしないから。」

「よからう、よからう、さう極まつたらもう一本だ。——お上さん、これを一つ。」

と云つて、井口は空ッぽの正宗の瓶を翳して見せた。

一同がぞろぞろとバアを出て行つたのは、それから又三十分程立つてからだつた。

「お上さん、僕も其處まで送つて來るぜ、なに大丈夫だよ、直ぐ歸つて來らあ。」

金公はさう云つて吾妻橋の袂まで附いて來たが、星野は其處で皆をタキシーに乘り込ませた。

「垂水君、君も乘つてつたらいいぢやないか。みんな方角が違ふんだから、どう廻せり路を

欠人

しなけりやならないんだ。」

「ええ、有り難う、―― 僕は歩いたつて譯ないんです。直き此の橋向うなんですから。」

垂水は餘り進まない顏つきで何か外の事を考へて居るらしかつた。彼れは其處からつい五六丁の向島の小梅に住んで居たのである。

「清ちやん、左樣なら、――」と、光代は自動車の中から大きな聲で云つた。此れから大塚の終點まで歸るんだと云ふ醉つ拂ひの彼女を中に挾んで、星野と井口とはまだ根氣よくおしやべりを闘はして居た。

第四章

「光代は己に惚れてるんだぜ、あの面でなあ、―― ほんとにしつこいッたらありやしねえや。」

自動車の影が遠くへ行つてしまふと、垂水は吐き出すやうに云つて、敷島の吸殼を地面へ叩きつけた。

「ああ弱つた、今夜見たいに弱つたこたあありやしねえや、僕あ先からやきもきしちやつたぜ。」

さう云つて金公は、その頓興な眼の玉を緋鯉が麩でも追つ駈けるやうにやパチクリやらせて、恐ろしく眞顏になりながら垂水の側へ寄つて行つた。

「おい、垂水君、君シツかりしないぢやいけないぜ、先生が感付いてるらしいんだぜ。」

「感付いて居る？ どうして？」

垂水は肩を聳やかした。

「どうしたツて君、垂水が怪しいから氣を付けろッて、僕に頼んだんだ。それにね、僕あ先(さつき)手紙を持つて、服部の所へやらされたんだが、少し變だと思つたから、手紙の中を讀んでやつたんだよ。」

「手紙で何だつて云ふんだい？」

「―― 手紙にや別に何とも書いちやなかつたがね、今夜頼みたいことがあるから、大急ぎで來てくれろッて　それだけしか書いちやなかつたがね、僕の考へぢやあ、服部が眞珠さんに惚れてるから、彼奴を使つて捜らせようッてえ腹なんだよ。大方それに極まつてらあね、今夜あたりやあ氣を付けなくつちやいけないぜ。」

「ふん、さうか、―― だけど服部なら始末がいいや、彼奴なら一杯飲ませてやりやあいいんだからな。」

小梅へ歸る筈の垂水は、橋を渡らうとはしないで、其處から金公とつるみ合つて公園の方へ戻つて來るのだつた。

もう彼れ此れ二時近くであつた。前にも云つたやうに、それは土曜日の晩だつたので、可なり遲くまで群集が出盛つては居たけれども、さすがに其の時分には廣小路の大通りも大概の家は戸を鎖して、「公園」全體がぽつと溜息をつきながら眠りかかつて居るやうであつた。――

實際、夜が更けてからのあの公園には、さう云ふ溜息が聞えるのである。たしかにあの公園は一個の偉大なる生物であつて、それが一日の勞役の爲めにぐつたりと疲れて眠つて居るのが、感ぜられる。さうして又、そこには群集の靈魂とでも云ふやうなものが、人通りの絶えた仲店の舗道の上や、觀音堂の簷の蔭や、活動寫眞館の近所などにさまようて居て、消え殘つた電燈の光の中をふわふわと漂ひながら、公園の眠りを脅やかしてでも居るやうに思はれる。さう云ふ時刻の「淺草」の姿を見た者は、何かの惡夢を連想したり、怪しい犯罪の事を考へずには居ないであらう。晝の公園が不思議な魅力を持つて居る以上に、夜の彼女が更に物凄い妖婦である事を知るであらう。―― 垂水と金公とは雷門の前を通り過ぎて、ちん屋の先を右へ曲つて、だんだんとカフェ・パウリスタの方へ歩いて行くのだつた。背の高い、すらりとした洋服姿の男と、ぶくぶくの木綿の羽織を着た子供じみた小さな男と、その二つの影はぴつたりと寄り添

つて、小聲で話をしながら動いてゐた。

「――よし、よし、それで分かつたからお前は歸れよ、さういつ迄も喰ッ着いて來るなよ。」

さう云つたのは垂水である。

「あ、さうだ、さうだ、つい話に夢中になつちやつた。遲くなると又お上さんに叱られあ。」

「だが、今夜は來るかどうか怪しいもんだな。――又その時はその時で宜しく賴むぜ。」

「大丈夫だよ。そこは僕の口の先でどうにでもなるから心配はないよ。梧桐寛治なんて、眼ばかりキヨロキヨロさせてたつて甘えもんさ。ぢや失敬。」

と云つて、金公は仲店の方へ歩き出した。垂水はオペラ館の前に立ち停まつて、やや暫らく其處にイんでゐた。

――鮫人前篇終――

大正十五年二月一日印刷
大正十五年二月三日發行

（鮫人）
定價金貳圓

著作者　谷崎潤一郎

發行者　山本美
東京市芝區愛宕下町一丁目一番地

印刷者　松井勇
東京市芝區愛宕町二丁目一四番地

發行所　改造社
東京市芝區愛宕下町一丁目一番地
振替口座東京八四〇二番
電話高輪四九九三番

松井印刷所印刷

529
168

谷崎潤一郎著

新選 谷崎潤一郎集 （新刊）

四六判上製 定價五円五十錢 送料二十七錢

神童・羹・惡魔・續惡魔・あくび・The Affair of Two Watches・前科者・異端者の悲しみ・人面疽・二人の稚兒・玄奘三藏・ハッサン、カンの沃術・柳湯の事件・富美子の足・ちひさな王國・獨探・呪はれた戯曲・或る少年の怯れ・母を戀ふる記・兄弟・恐怖

愛すればこそ （百四版）

四六判上製 定價一円六十錢 送料十八錢

愛すればこそ。永遠の偶像。彼女の夫。或る調書の一節

痴人の愛 （五十版）

四六判上製 定價二円 送料二十二錢

マゾヒズムの代表作として世界的名作

愛なき人々 （卅五版）

四六判上製 定價二円 送料二十錢

本牧夜話・お國と五平・白狐の湯・愛なき人々

544
221

文明は新聞を要する。
文明人とは新聞を讀むものの事なり。
愛讀、熱讀、劇讀、摘讀、乱讀、
等々、新聞賣りの増大は依て
文明の発達を意味する

終